339
704

始

修養教話

339-704

金原明善翁の題字

大正
5. 5. 9
内交

谷田探海師の筆跡

天下和順日月清明風雨以時
災勵不起國豐民安兵戈無用
崇德興仁務修禮讓

大正四年仲秋　海題

自序

題して修養教話と云ふも、元と本書を出版せん爲に編述したるものにあらずして、過去數年間に於て各地各所の高壇より講話したるものを其都度筆記し置きたるもの〻中、通俗的適切なるものと思惟するもの五十種を選みて編綴したるものなれば、必ずしも教話の順序を逐はず且又悉く嶄新のものに屬せず、極めて陳腐なるものを含み居り、大部分は世間周知のものと識者の嗤笑を受けるやも不計、されど古今東西の英雄の逸事、文人畫家の奇才、孝子烈婦の事蹟等を引例したる點は、讀者に對して單に其事歴を熟知せしむるに止まらず、進

んで其思想行爲に則らしめんとしたる老婆心に外ならず、然れば本書によりて甚だしき利益を供する事は、或は不可能なるやも知れざれど、決して害毒を流布する種のものに非ざることは斷言するに不憚ざるなり、幸にして一讀修養の資ともならば快之れに過ぎず。

尙本書出版に際し森本得之君、廣谷又次郎君は多大の助力を與へられたり、茲に一言記して感謝の誠意を表す。

大正五年四月上旬

冷雲院に於て春色充溢せる庭園を眺めつゝ

谷田探海識す

目次

第一、根本の忘却……一
第二、精神の快樂……三
第三、温厚德實……五
第四、一生懸命……六
第五、人生の悟得……八
第六、女德涵養……一〇
第七、熱心成功……一二
第八、古儀佳式……一五
第九、修養の精力……一八
第十、太田道灌の逸事……二〇
第十一、楠公の壁書……二四

第十二、賢母良妻の價値……二六
第十三、貝原先生の格言……二八
第十四、妙技と謙讓……三〇
第十五、質素の眞意……三二
第十六、欽仰遺德……三四
第十七、乃木大將自及の敎訓……三六
第十八、貞女烈婦の最後……四〇
第十九、謙遜美德……四四
第二十、質素と直言……四六
第廿一、儉約の貴重……四九
第廿二、斯道の熱心……五二
第廿三、是非曲直……五五
第廿四、彼我不二……五八
第廿五、幸福とは何を言ふや……六二
第廿六、誠意天に感す……六四
第廿七、寸陰を惜む……六八
第廿八、感化の偉力……七一
第廿九、訓陶の勢力……七四
第三十、細心注意……七七
第卅一、廉潔高崇……八二
第卅二、三の妙符……八五
第卅三、偉人の遺誓……九一
第卅四、偉人の消息……九四
第卅五、朋友相信……九七
第卅六、落葉片々……一〇一
第卅七、消夏法眞意……一〇四

第卅八、慶哉得遇……一〇八
第卅九、念佛の威力……一一一
第四十、人生の意義……一一五
第四十一、意思強硬……一一八
第四十二、歳暮の斷片……一二二
第四十三、新年の福壽……一二五
第四十四、修養の偉人傳……一二八
第四十五、人格の高崇……一三二
第四十六、奇人の奇蹟……一三五
第四十七、愼重の態度……一三九
第四十八、遁世の眞價……一四二
第四十九、豪氣人を呑む……一四六
第五十、普遷と自覺……一五〇

修養教話

谷田探海述

第一、根本の忘却

人情の眞實……織田信長と今川義元……毛利新介の手柄……根本の教訓

人情と云ふものは、妙なもので、一朝火災のありしとき、平生から眞實に火の用心は大事なりと思ひつゝしみの者には、なんの褒美もありませんがされど其の時、一度精出してはたらきし人には、すぐに褒美をやるか御禮をだします、こふゆうのが大抵の人情であります、むかし織田信長といふ人が今川義元と戰ふたことがありましたが、この義元さんは大層戰爭が上手でありましたから信長さんもこまりはて、いかゞにすれば勝利を

ゐられんと、いろ〳〵しんぱいを致して居ましたが、其時に信長さん弟子で梁田出羽守といふ人は、大變に策りごとが上手ですから、この出羽の守と信長さんと戰爭の謀略をなして、今川義元を責め入りましたが、大に義元の軍は破れ勢ひを失ひました、その時毛利新介といふ武勇な人がありまして、今川の軍に突入して一生懸命に働きまして、ついに義元の首を打ち取りまして、信長に見せましたら信長大變によろこびました、こゝで今川は滅ひてしまい、戰爭は終りましたが、信長は戰爭のてがらの人々へそれ〳〵功勞を送りますに、第一に出羽の守を賞しまして、沓掛村三千貫を與へました、而して次に毛利新介へ褒美を出しました他の家來ども云ふようには、新介は實に剛氣な人である敵陣に突入して大將義元の首を打ち取りたる手柄、感心致すべきことである、それにもかゝはらず、出羽の守へ第一の賞を與へたりと、これを聞きたる織田信長は、なさけなきことを云ふかな、今回の戰爭に出羽守の策略なかりせば、なんぞ今日の勝利を見る

ことを得んと、大に他の家來どもに誡めたりと、この教訓の咄しは他人を使ふものゝ大切なることである、前の火事の咄しの如く、人はその根本を知らねばならぬ、とかく外面ばかりに目をつけるから誤りがあります。

第二、精神の快樂

物質の樂みより精神の樂み……文帝と何尙之……佛教を以て國教させる佛の加護

耳に聞て喜び眼で見て樂むも、心に於て本統の樂しみを致したいものであります、其心の中の歡樂は心に慰安を與へ善き道を守りて、こゝで永久の樂みを得るのであります、其の善き道とは佛教に說く孝悌忠義の道より我等の心の歸着まで教示し玉ひしを先づ善き道と云ひます、支那に宋の文帝と稱する王さんは、明君でありましたが、何尙之といふ賢人なる臣下がありました、その家來に王さんは尋ね玉ふには、全体王として、國

を治め民を撫育するは尤も大事なことなり、されば其天下を明に治む教はいづれにあるや、何尙之は袖かきあはせ、うや〳〵しく申上ますにまづ教も澤山ある中に佛樣の道こそ尊く且つ結構でありますそれは統ての惡を制して善き事を修せよと勸めたれば、一たび之れを信じたら國に善人多く惡人なくなれば、おのずと天下泰平に治まることになります、王さんはこの言を信じてあまたの名僧を集めて、種々の教法を聞き玉ひしに、なるほど何尙之の言ふ通りにして、難有御教示で大層王さんは喜び玉ひて、常に此教にて天下を治め玉ひたれば、天下もよく治まり民も安く暮せりといふ、人は外面の樂しみより心に無上の歡喜がなければ、人生は決して愉快であまりせぬ、されば佛樣の道に順がへば、佛樣は我を守りて常に離れ玉はぬ、喜ばしき一生を送り樂しく生活さねばなりませぬ。

第三、温厚德實

品格高崇……柳里恭の格言……温順の訓話……孝子の師匠最後の訓誡

庭前の松も手入れをするので價値があるのです、人も謹慎する所ありて其人の品格も地位も高まります、其の慎しまねばならぬことに就て、柳里恭といふ賢人は尤も人として嫌忌せられ遠ざかれる理由として、六項の事を教へてくれました。

一、人として人に高ぶり應平に見下げる人ほど憎きものはなし。
二、一冊の書物も讀まずして何んでも物識り顏にするほど憎きものはなし。
三、人に物を遣り又は人を助けたることを恩に着るほど憎きものはなし。
四、物をおしみ又は吝嗇ほど憎きものはなし。
五、あはれみの心なく利慾ふかく我身ばかりかまふ人ほど憎きものはなし。

六、人をうらみ又は嫉むほど憎きものはなし。

斯樣に示してくれられました、大に注意すべきことであります。

又人は柔和くなり温順にして、なんとなく人好きのする樣に行なはねばなりませぬ、曾て老子といふ人がありましたが、此人の師匠に常從先生といふ人が、死するときに弟子の老子に己れの口を開て見よ、口中に舌は殘れりやと問たれば、老子は有りと答ふ、然らば齒は損せずと殘りしやと問ければ、老子は無しと答ふ、こゝにて先生の曰くに、舌の損せずしてありしは之れ柔きが故なり、又齒の早く亡くなりて損せしは剛きが爲なりと、是れ柔能く剛を制すと敎訓を施せり、されば人に可愛がられ、人に敬慕せらるゝも皆温和く爲してこそ、結構なれ。

第四、一生懸命

荻生徂徠といふ人は江戸の生れでありて方庵と云ふ人の子でありました、所がこの徂徠先生は大層なる大學者に成た人でありますが、この人幼年の頃は伊藤仁齋といふ大學者の門に入りて學問をしました、其の親の家を出づるとき母親は徂徠に申す樣そなた此度學問をするため他の家に行く汝專心一致學問に精勵すべし若し學成らずんば死して再び親子の會談することなし、と母は涙を流して嚴訓を下されました徂徠も大に覺悟をきめて一生懸命に學問に從事しましたが、徂徠の學問は一向に進まず書籍の敎訓は直に忘れ物の理解を得るのみならず反て怠惰に流る、或る時大變に大水の出た時幸に死して歸らぬと決心して堀川に身を投げて死なふとしました、此時に仁齋先生は之れを止めて、『なぜ左樣な無謀なことをするのである生は難ふして死は易しだ不心得にして一朝身を失なへば亦と得難大事なるべし何にが爲め死するや』、と尋ねられたが徂徠は涙ながら申さ

徂徠先生の初年……伊藤仁齋の敎訓……大器晩成

れるよふ、『私は愚鈍にして學問は出來ませぬから……』と答へた其時仁齋懇ろに諫めて云はれるよふ、『汝其身を水にはめるよりなせに書物に身をはめぬのであるか命を捨てる程の思ひで勉強すればどんなことでもならぬことはない況して學問をや』と大に力を勵まされたれば徂徠は大に感じ其の後寢食うち忘れて刻苦勉勵しました甲斐ありて天下に大に名を擧げました、人も其の如く縱令如何なる愚なもの無能のものでも、命懸けに勉強すれば成効せぬといふことはありませぬ。

第五、人生の悟得

檀林皇后の美德……林葬教化……穆山和尚の畫贊……眞如悟得

檀林皇后といふ、大層美しき御方で、嵯峨天皇の御后にましまして、嘉知子と申し上げ婦德の正しき心の優しき御方で、常に貧民をおいたわり老人を助け孤兒を可愛がり玉ひ

しことを唯一のお樂みとなされ、人呼んで肉身の菩薩なりと賞讃して居りました殊にこなたは佛敎の大信者でありましたゆへ、寺を建てたり又佛殿を造り御經文を寫したりして、佛樣に歸依しありましたゆへ御自身の人格は倍々向上し陛下も最も御寵愛遊ばされたり、殊に感心なことには、皇后の御臨終のとき御遺言なさる樣には、

『我が死したる後の屍骸を西山の林に捨つるべし屍骸の腐れ爛れたる姿を視て誰か驚かん世の色慾の惑ひを解き自己を反省するならん』、

と誡め遂に西山に林葬なさつたのであります、實に御自身をして死して後まで人を敎化せられしは吾人は大に意せねばなりませぬ、

禪宗に穆山和尚といふ方がありました、大層能く悟て居られました、この悟るといふことは六つヶ敷樣だが、統て私といふ上の慾を脫け我儘の垢を去た所に悟りといふ事になる、或る時此の和尚に或人が達磨大師と遊女との對面の圖繪に替を書てくれたしと賴み

を受けたれば、和尚は直に筆を採りて認めました。

九年面壁なんのその　わたしや十年浮き勤め
煩悩菩提の二筋に　わたしや誠の一筋を
加へて三筋で日を暮し　糸が切れたら成佛と
客の相手にのむあみだ　濟度なさるとなさらぬは
それはあなたの御了簡　外に餘念はないわいな

第六、女徳涵養

女子の大禮……景樹先生の息女へ教訓……當世流女子の訓誡

結婚と云ふことは、人世の尤も大切なることにて、輕々にすべきにあらず、若し一身を過てば終世取換へしのつかぬことにて、一生不愉快、不幸に送らねばなりませぬ、注意

すべき事であります、彼の近世有名なる歌人である、香川景樹先生は平素に能く注意の届く方である、或日可愛の娘を他家へ嫁入りさする時、先生は娘に訓敎して云く、

『汝ち今他家に嫁するの縁あり嫁したる良夫の家を以て我が生れの家と思ふべし若し此家出たる際は何處にか行所あらん』

と懇ろに諭し篤く訓へて其の上に一首を添へました、

そむくなよ、つまにつかふる、みちのくの、ほそぬのころも、むねあはずとも

此の歌に一振の懷劍を添へられました、人の妻たるもの何事によらず、柔順にして夫につかへ、又大切にして貞操を守らねばならぬ、元來女子はどの方面から言ふても、男子と其の性格を異にせるものなれば柔能く剛を制する裡言の如く、愛らしきやさしき謙色の所に女の德があるので、此德ひとたび現はれて、世に貴ばれる良妻となり、賢母となるのであります、故に香川先生も我娘を他に嫁するに其意を歌に示したのです、嫁

した上は縱令ひいかよふの申條あるとも決して夫の怒に觸れることなく、よく夫を扶けよく身を守らねばならぬ、若しこの事ならずして離緣をせらるゝ樣のことあれば生て歸らずいさぎよく此の懷劍にて自害をせよ、ほそぬのころもむねあはずとも、誠に親として我娘子に示したる此の一句涙もこぼるゝ難有き言であります、今の女は何學校卒業何藝能あるとて身に誇ることありて、やゝもすると夫を無視し、あらぬ權利を主張して識者の齒ぐきも合はぬ程戰慄するの行爲を見ることまゝあるものです。

第七、熱心成功

加賀千代の初學……千代の名吟……斯道の熱心……三井家の家訓……佛像拜禮

何んでも熱心にやらねばなりませぬ、他所道に心を觸れると事は、ならぬのみならず身を危まつ事があります。彼の有名なる加賀の千代といふ女史は俳諧の達人であつたが、

然し斯く天下に名を擧げたる迄の苦心は實に感心なものであります、此人の國は加賀の松任といふ所で、極めて僻鄙なる不便な田舍でありしゆへ、幼少より俳句に心をよせたるも、是れぞと好き御師匠もなければ常に悲しんで居られた、適有名なる俳諧師の盧元坊といふ人が行脚して此地へ御越しありたれば、千代女の喜び限りなく、早速其旅宿へ尋ね參りて、しか〳〵かよふと物語りして弟子にならんことを、賴みたれば御坊は許す樣子もなく、あざ笑ひながら先づ此の俳句題を出すから、これにて女史の思ひ樣讀み來るべしとて、時鳥といふ題を與へました。

かくて千代女は此たび善き師匠に遭ひたる此の上もなき幸ひなれば、喜び勇んで我家に歸り、机上によりて考案また考案、一句咏んでもならず二句三句と時を移して咏だるも一も佳句は出でず、悲み愁むうちに夜は明けたれば、女史は今日此句にて弟子入りの許しを受ける大切なる時なればと一生懸命に考へたるも名句は咏めず、されど致し方なけ

ねば御坊に會んと旅宿へまいる途中ふと思ひよせた句がうかんだから、御坊に面會して昨夜は一睡もせで沈思默考名吟に心を挫きたなれど名句はいでませぬと、盧元坊は其熱心なるに大に感心せられ、御坊の謂はるゝに一夜心をくだきたればなんなりと句は出でつらん、さればなんなりと咏み玉へかしと、こゝで千代女は途中で思ひうかべたことの葉をとりあへず、句咏をしましたが、それは

ほととぎす時鳥とてあけにけり

と咏だれば御坊は大層感心なされて、女史よ、汝熱心以て事を遂げることを得、とて遂に師弟の約束をなされた、それより後は千代は熱心に俳道に心を一つにしたる甲斐ありて天下に名なす人になりました、誰人もかく熱心にありたきものです。

一、人は財産家になりたいと常に希望して居りますが、併しその財産家になるべき種を蒔かずに唯無意味に成らんことのみ思ふて居るは間違であります、彼の屈指の金滿家の

三井家である、この三井家は毎年正月の元日には先祖の畫像を祭りて家内一同威儀正しく禮拜をなして、それより當主に御禮をするを家例としておられます、さて其畫像は如何なるものかと、見まするに剃髪染衣の姿で佛樣に御禮をして居られる、この遺訓は佛樣の敎に從ひ能く其の身を修めたる故、今日の三井の富貴になりたるは、佛法に歸依したる原因であるからです。

第八、古儀佳式

正月……元旦……恭水……屠蘇酒……蓬萊……大服茶……雜煮……門松
注連縄……七種に若菜

毎度修養敎話を致して居りますが、今日は芽出たい、新年に因んだことを話して見よふとかく近年は新年の御式を簡略粗漏になりて古代の永式を無視するは悲しひことです、

今其古式の一二を擧げて話しませう。

正月　一年即ち十二ヶ月の初の月を云ふが是れ玉者正しきに居るの義にて、睦月とも孟春とも端月とも言ふのです。

元旦　これを三始とも三元ともいふ、即ち日の元月の元年の元なり又三つの始めなり、古語に『一年の計は正月にあり』と誡しめもあれば、『元旦やまたうか〳〵の始かな』と歎きた句もあります。

若水　元日の朝家の内の男子が威嚴正しく一番水を汲む、これ年中の邪氣を拂ひ又家内和睦をするといふのです。

屠蘇酒　屠蘇散とも云ふ、藥を一貼紅の袋に入れ、晦の夜より井戸の中につり元日の朝取り上げ、酒にしたして先づ年若きものより飲み始め老人に終る、これ年中惡疫流行の病にかゝらぬといふ、尤もこの始めは唐の時代にして日本では嵯峨天皇の弘仁元年

より行ひそめたりと言ひ傳へて居ります。

蓬萊　三方に栗、榧、蜜柑、柑子など積み重ねて之れを賞して賀禮の客にお勸めをする支那に蓬萊山といふあり、此の山には常に仙人の住む所なれば、今は壽きを祝ふとてかくするのであります。

大服茶　茶の中へ梅干を入れ頂きて呑む、これ一年中邪氣を拂ひ又梅は春に緣あり茶のあつきをむめるとて祝ふ、貞德翁の俳句に、『大ふくの茶のあさにやうめぼうし』。

雜煮　齒固めの餅を煮て食するといふ、つまり鏡の形にして神佛に供へ、又家内中も之れを煮て食す、昔鏡を岩戸の前にかけ神樂を奏して天照大神を慰め奉りたるなりと祝ふ、古歌に『正直に丸きが人の鏡にてそのうる心もちが肝心』。

門松　松は千歳の常盤木なれば竹は貞操の正しきもの梅は百花にさきだち香の善きを賞して祝ふ古式であります。

注連縄　天照大神が天の岩戸を出で給ひしとき、中臣忍部の兩神は縄を引き大神を止め奉りしより始まる。

七種並に若菜　春を呼ぶ意味にて七種の若菜を摘んで菜粥をなして家内むつまじく食す

この始は宇多天皇のとき御殿の官女に七種の若菜を摘ましめ玉ふより古例となす、昔は正月の子の日に奉るなり、今は正月の七日に行ふことゝなりました。

他に澤山正月に因んだ話もあれど本紙の餘白もなければ擱筆。

第九、修養の精力

太田道灌の人格……定正の謀計……道灌辭世の名句……死の觀想

常に善き道を修養いたる者は、いざと云ふ切迫のときに顯出る者でありますから、常に善き教話を聞き好き美事を勤勉ねばなりませぬ、彼の太田道灌といふ人は、智勇は勝れ

武藝にも達して居られ、殊に和歌には巧明であつたことは人の能く知る所です、また取分け佛法を信仰じた人で、有名なる龍穩寺の泰叟和尚に就て學問なり和歌を研て居られ後又雲間和尚を萬年山に請待をして盛に佛法をさばれた、然るに此時代は山内顯定扇谷定正の二人が關東を管領して居たので、世にこれを兩上杉と云ふて居たのであります。

道灌は定正を輔佐て居て、政事のことなり萬事自分は親切に從ふて其の仕方がよいから自然に定正の信頼する所にして且つ評判も好くなり、所が顯定といふ人は非常に奸策の人であつたから、此の道灌の定正に歸順するを嫌忌して之れを避けしめんと謀りて常に伺候ふ所でした、折しも定正の麾下にて謀叛を企てる者ありたれば、此の謀叛人こそ道灌なれと定正に讒言したれば、こゝに於て定正は大に道灌を疑ひ其の動作を窺ひ用心をなしたのでありました。

其時定正は相州糟谷に居ましたが、道灌はかくと知らずに糟谷に行きて定正に面謁を請

ふて親しく談話を交せました、定正は常に疑ふ所より今道灌の面謁に來りしは實に我が間隙を伺ふならんと察して、哀れにも氣の毒に道灌は浴室に在るを時よ幸ひと、四方より槍をつきつけ『ヤア道灌入道よ常より汝は和歌を嗜なめり今此の場で詠んでは如何に』と云はせたら、大抵の人々ならば和歌どころでなく戰慄ひ上る所である、流石はかねて修養して居り、殊に佛法の敎で精神を鍛練して居られるから、少しも動く所なく泰然爾若として聲高らかに一首の歌を詠まれました、それは

かゝる時さこそ命のおしからめかねてなき身と思ひ知らずは

と詠んで悠々として刄を受けて死されました、道灌の逸事話も澤山あるりますから次に申上げましよう。

第十、太田道灌の逸事

後土御門天皇に歌を奉る……利根川を渡る策……潮の滿干を知る歌
一句の勇氣……妻の一周忌の弔歌……人生の愛苦

前記には太田道灌の潔き最期のお譚しを致し、ましたが、道灌入道の逸事を記載しますれば、

寛正年中に上洛したる時に、御土御門天皇より武藏野曠原は何かゝの所なるやと尋ねられたるときに、

露おかぬ方もありけり夕立の空より廣き武藏野のはら

と詠じ奉れば、して又其の風光はいかゞなるやと尋ね玉ひたれば、

我が庵は松原つゞき海近く富士の高根を軒端にぞ見る

と詠じ差上奉りたれば、天皇は叡感斜ならず直に筆染めさせ玉ひて、

武藏野は高茅のみと思ひしに斯かる言葉の花や咲くらん

と云ふ御製を賜はりたるとありますり。

又或る戰爭に從軍して居る際に利根川を渡ちうとしたが、生憎闇夜で川の水流れの淺深がわからぬとき道灌は古歌を思ひ出し、

底井なき淵やは騷ぐ山川の淺き瀨にこそ仇浪は立つ

との意味にて石を投げて水音を聞き、水音が高いから馬を入れてもよいと命じて、難なく河を渉り無事に通ふたことがあります。

又上杉定正が兵を廳南へ寄する時、夜半に道灌をして今は潮の滿干を見せさせれば、道灌は陳屋を二三歩出でゝ直に歸り來り、潮は今は干潮に候きと答へたれば、定正訝り如何にして知りしやと問ふと古歌に、

遠くなき近くなるみの濱千鳥鳴く音に潮の滿干をぞ知る

とあり候へば、これにて知り候べきと答へたれば定正大に感じたりといふ。

又小作の城を攻めた時には、敵多くして容易に落し入れることならねば道灌は一首を示して、

小作はまづ手習の初めにていろはにほへとちりぬるになる

と詠じて部下に勇氣を鼓ました、道灌が妻の一周忌に際して詠んだ歌に、

めぐり來てまたも悲しき月日かなわかれし人の今日をおもへば

人世に於て最も悲慘なるは此の愛別離苦の苦しみである、されども去るものは日々にうとしの例へで、五十日も經てば涙はでやみ百日すれば悲しみも何處へやら、終には忌日命日さへ忘るゝ程になりゆくものなれども、又めぐり來る一周忌の當り日には去年のことが思ひ出され去年の今日は斯うでありたかと、其當時のことに思ひ至りあつき涙にむせんだと云ふ歌のこゝろである。

第十一、楠公の壁書

心を養ひ身を修め……忠孝の眞意……禮義作法に……學問の道

楠正成といふ人はなにかに能く注意せられた方である、このかたの善行美事は澤山あれど、其の一としての壁書を介します。

おのが分をよく知れ極樂を願はんより地獄つくるな、
身を働らかせば食うましたのしみを好めば苦み多し、
ほまれを求めんより誘りを厭へ珍事に誠すくなし、
酒はのめども呑まるゝな立身を思はんより恩を忘るゝな、
慈悲はするともかはりを取るな足る事を知りて及ばざることを思な、
人は嘘、世は無常なり忠を安んじ死を恐るゝ事なかれ、

一得あれば、一失あり手柄だてせんよりは氣にたがふな、
物ごとに肝要を知るべし身のために身をそこなふな、
着るものは寒くないほど食物は腹八合、
おのれが命は主のものぞ私にすつるな、
居所は風雨を防がん爲めのもの書は讀めるやうに書け、
金錢は溜んより借金をするなものいへば聞へるやうにいへ、
舌は和らかなる德に依て全し齒はかたきことあつて早く損ず草木は天性にまかす
鳥は衣食をたくはへぬゆへ飛行自在なり人は名利につかれて一生を苦しむ、
過ぎたることを悔むな知らぬことを案ずるな、
禮あつくして人の非をとがむべからず弓鐵砲はあたるが上手、
かたなは切れるが重寶學問をするは理を知るがためなり、

懈怠のものは永く貧なり人事ゆはんよりおのれが非を知れ、
貧賤をも憚からず只心は正直に交はり五常を守れ、

第十二、賢母良妻の價値

楠公の御後室……正行へ母の教訓……正行の肝銘……兒童の遊戯

世に賢母良妻の希望あるは、尤ものことにして、いざと火急なる非常のとき家を起し夫士を助け兒童を救ふは、餘程の忍耐と苦辛を經ずば成し遂げざるなり、彼の楠正成の御後室は最も世の女子の模範となるべき方にて、正成公が湊川で戰死をなされたとき敵の足利尊氏より君の級首を送りたれば、御後室及び今年十一歳になる正行は之を見て大に歎き沈みかねてより、斯くあるべしとは思ひもうけたることなれど、級首にはなんとなく殘念の色を浮べ玉ひしを見て母子悲みの心胸に滿ち歎きの涙せきあへず、流るゝ涙

を袖におさへつゝ正行公は十一歳の少年にも似ず、持佛堂にかけ入り父の御伴を仕らんと父が兵庫へ向ふ時形見に留めし菊水の刀を右の手にぬき持ちて、袴の腰を押し下げて自害をせんとぞ居たりけり、母急ぎ走りよりて正行が小腕に取りつきて涙を流して申しけるは。

栴檀は二葉より芳しといふ諺もある汝おさなくとも、父が子ならばこれ程の理に迷ふべきや、故判官が兵庫へ向ひし時汝を櫻井の宿より返し留めしことは、全く跡を訪はんが爲めにあらず腹をきれよとて殘しおき玉ひしものにあらず、我れたとひ運命つきて戰死したるも、死に殘りたる一族の若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し敵をも滅して、君の御代に赤き心をたてまいらせよと、謂ひ置き玉ひしなり其遺訓具に聞き居るならんいでや片時も速く成人をなし敵を亡ぼし國を安くして、君の御代を治め奉らんものと、

正行に訓誡せば正行も實にも道理なりと感じ、其後より父の遺言母の教訓、心に染み肝に銘じつゝ、或時は兒童共を打ち倒し頭を捕ふる眞似なぞして、これは朝敵の首級をとるなりと云ひ、或時は竹馬に鞭うつて將軍をおいかけ奉るなどいひて、遊戯ごとによせて心を勵ませりといふことでしたした。

第十三、貝原先生の格言

人の心……言語の大切……一日の計……人生の航路

貝原益軒といふ人は非常なる學者でした、尤も教育には畢生の志を立てしが其の語至て平易にして誰にでも能く了解せる訓誨の書物を澤山著された、その初學訓、養生訓、女訓の如きは婦女兒童のよみて益を受けること少なからず、今其の教訓の一端を左にかゝぐれば、

人の心は唯仁義禮智信の性なり、人の道は唯君臣父子夫婦長幼朋友の人倫の行なり、五常の外に心なく五倫の外に道なしと知るべし、これを知るは智なり、これを行ふは行なり、此外にさらに心と道とを求むべからず。

又曰く、

一言の過にて莫大の禍となり、一事の誤りにて一生の憂ひとなる、慎むべし平生慎み

ある人も、事により時によりて怠り弛みぬれば、一言一事のあやまちによりて思ひの外なる禍ひとなることあり、一言一事も慎まずんばあるべからず。

又曰く、

今日は明日の計をなし、今月は來月の計りごとをなし、今年は來年の計りごとをなし平生は一生の計をなし、生前に早く死後の計をなすべし。

辭世に曰く、

過ぎしかたは一夜ばかりの心地して八十路あまりの夢を見しかな

第十四、妙技と謙讓

觀世太夫の熱心……斯道の秘訣……吉田先生の門下……關菊の謙讓

享保年間に、能狂言の泰斗といはれた、觀世次郎太夫といふ、斯道の名人がおりましたが、或時京都にて木賊刈の技を演じられたが、上手だから之れを見て譽めぬものはなかつた、中に一群の田舍ものどもがなにか、ひそ〳〵とさゝやきあひて居るのが、なにか如何にも樣子有げに見へましたから、次郎太夫は彼の田舍漢を樂屋へ招きて尋ねたるに『然よおれらは信濃國で木賊刈を渡世とするものだが、元來木賊は鎌を外に向けて一刀に切るものである、それにも拘はらず御身は鎌を內に向けて二刀に切られたで、あれにてはまことの木賊は刈り難いと思ふ』、と親切に其秘訣の所を譚したれば、次郎太夫も非

常に喜び大に感じて厚く御禮を述べたり、其後次郎太夫は江戸にて此の又木賊刈を演じたるとき、曾て信濃の人より聞き得たる通り鎌を向ふ外に一刀に切れば、こゝに一層好評を博し次郎太夫の木賊刈は完全無缺で天下の名技であると、誰人も讃稱せぬものはなしと、すべて何事でも其妙手の秘骨はあるもので、所が人は其秘骨を得るまで辛抱せぬから、其の妙技に遙することは出來ぬのであります。

彼の名高き吉田松蔭といふ學者がありしに其の門人に高杉晉作と久阪通武といふ兩人は俱に大志を抱た人です、此二人は吉田先生の膝下で兵法を學びた人で有ました、或る時通武の言ふやう『晉作は感心な人である天下の英士になるだらふ我の及ぶ所でない』と常に敬意を拂ふて居りしが、晉作は又常に人に語つていふよふ、『久阪氏は天下の奇傑である後世恐るべき人兎ても我等の及ぶ所ではない』と互に其の謙遜をなして居られたが、松蔭先生之れを聞きて、ア、兩人とも感心な人だ、互に謙り合ふて居る、これでこ

そ非凡な人である、これは取りも直さず國家の幸ひである、人はとかく自惚心の多きが世の習ひ、なんとなく我は人より勝れたりと思ふ兎角譲りてさへ居れば、物に角たつ事はなし自身は安穩であります。

第十五、質素の眞意

アレキサンダの全句……カトーの質素……オーガストの儉約
ロドロフの粗服……チャーレスの手帳……金錢を使用する場合

儉約の咄し二三致して見ましよう、貝原益軒といふ學者の言に、『身に奉る薄きを儉約と云ふ』とありて、大切なことで、古來明君より高貴の位にあつて節儉を守られた方は澤山あります。

アレキサンダー大王は、我は王さんだからとて華美な服を身に纏ふことなく、常に臣

下共と少しも變りのなき、極質素なる服をつけて喜んで居られました。

羅馬合衆政治の大統領カトーは、一枚の上等なる上衣を整へるとて、百斤以上を費やしたことはない、而して平生人に告げて言はれたるに、如何程價は些少でも不用のものは高價であると思ふ』と。

曾て殆ど全世界を一統せられた、オーガスト皇帝は常に奢ることは露だもなく、皇后后妃たちの手づから織られた、衣服を着けられ、寢蓐も臣民等と同一の物を用られた。

オーストリヤ家の祖先である、日耳曼のロドロフ皇帝は、イツモ粗服を召されて見苦しい程であつた、或時、麭燒の家に立ち寄て、火にあたられると、其の家の妻は、皇帝であることを知らないものであるから、大變見苦しい人であると、痛く罵つて追ひ出したことがありましたのです。

佛國のルイ第十一世も、チャーレスの如く、到て質素なる方にて、衣服に奢られたこ

とはない、其のルイ王の手帳には二志の棉花を求められたこと、又長靴の脂一斤半ばかり求められしことなど記してありました。

斯樣に何れも世に名高い國王で、一身の爲めに費す所は、極儉約であるが、軍事又は國家のことについては幾千萬の、大金を費しても少しも惜まれなかつたのであります。

第十六、欽仰遺德

慈愛の御聖德……風流の御聖德……質素の御聖德

先帝陛下には、御慈愛深きにましますは、今更ながら懼れ多きも、其御仁慈の程を仰き奉れば、國民の統てに御心を灑せ玉ふは、言ふも畏こきことなから、彼三十七年の日露戰爭の當時の御製にも、

國のため仇なす仇をくじくともいつくしむべき事な忘れそ

なんと難有き御言ならずや、敵國と謂へども敵人それはその國のために倒れたれば決して憎むべきものもでない、隨分捕虜となりたる者も、相當の待遇を施せよとの御仁慈なる御言と承はり殊に民草の上にも取分け大御心を懸させ玉ふは、老ひて養ひ人のなきもの、幼ふして親なきもの、病んで救手のなきもの、これらには御仁慈の深きことは、先年も無告の民へ參百萬圓御下賜ありと、貴きや有難きや、ただ嬉し涙に咽ぶるのほかはありませぬ。

御風流に渉らせ玉ふことは常に候ふことにて、御庭先きの樹木にても植木師の鋏入れを好み遊ばされず、自然の枝葉の蒼茂なるを愛せられ玉ふと又草花の如きは、と、わけ御愛翫あらせ玉ふと、其他玉體に觸れ玉し器物は統て御風流に渉らせ玉ふとなり、殊に三十一文字の御巧に在らせ玉ふも九萬首も御製遊ばされて、月に花に雪に風に、民草に御心を御寄せ玉はりて、御詠み遊ばされしと、實に畏き多きことかな、世に乾燥無味に日

を送りて何の風味を弄ばんとは恥ぢ入りたることではありませんか。

御質素なることは、今更ながら恐れおほひことなれど、常に御召し着の御服如きは、二三度の洗濯着を御召し遊ばさると、御食事にも殊の外御儉約遊ばさせられ、事によりては御中食に御召し物の御殘物を御夕餐に召し上ること度々あらせ玉ふ、彼の日露戰爭當時も一汁一菜に御召し上り遊ばさせられ宮中一統は大の御質素で渉らせ玉ひしとなん、殊に御病氣に罹らせられても、御轉養もあらせられず宮中にて御質素に、御靜養遊ばされしとは、實に感泣の外はないそれだも候ひ奉らで、國民の有福なるもの朝に華美に流れ、夕に贅澤に矯り居る、大御心を忘るゝも悲しきことどもかな。

第十七、乃木大將自刄の教訓

二大の活教訓……邸宅の質素……大將の食事……東宮殿下へ拜謁

對抗演習の逸話……將軍常の起居

九月十三日午後八時に乃木大將は

うつし世を神さりませし大君のみあとしたひて我は行くなり

と詠まれて薨去せられた、これには社會の人は兎や角と申すも、將軍の死は飽迄も自分一人の責任を感じ、且つ　陛下に從ひ奉らんとする純乎たる意志であつたのです。

大將の死によりて二つの大なる活教訓を得たのであります、其の一は　聖上に對し飽迄も相濟まぬと云ふ義務觀念と、今一つは旅順の戰ひに幾多の親愛なる部下を傷けたとの優しい心情であります。

大將の生前の一二を伺へば吾人の教訓になることのみであります、大將の邸宅は頗る質素なことにて、應接室の絨氈なども古く且ぼろ〳〵に擦り切れ、卓子と椅子の外に何一の裝飾らしきものはありませんでした、併し既に至ては堂々たる煉瓦造りであるのは之

れ軍事の大切なる心掛けとは馬の上に現れて居るのです、實に之れを見ては軍人中にも恥しひ人があるだろふと思ひます。

又人をいたわること切にして、飯は塔の如く茶碗に盛り一碗にて替へられし事なく、酒も小さき茶碗に唯だ一杯を汲み食前にチユーと一呑みに呑みほされ、又下女下男に至るまで副食物は隔てなく一樣に取られたのです、世に御前氣取りの主人上下懸隔の甚しき人やこゝろすべきことにて。

將軍は殉死の三日前に　東宮裕仁親王殿下へ拜謁を賜るとき、懷中より山鹿先生の著述の『中朝事實』の書物を取り出し、語を改めて曰く、この書中は將來殿下に於かせて一天萬乘の尊きに立たせらるゝ時、最も御參考となるべき多きを信じ、其の要所には小臣が自ら朱點を附しあれば、呉れ〳〵も御精讀御翫味を希ひ奉る次第なりと暗涙を拭ひながら、せめて亡き後の思ひ出にとて心の御別れをなされたのです、將軍の心中察す

るに唯涙より外はありませぬ、嗚呼何たる忠節なことかな。

近き物語りとして、往年の秋北攝の野にて對抗演習ありし時、彼宿舍は伊丹町服部遊心氏方でありましたが、其際主人は何くれとなく心組みをなし、金口の卷煙草を出したれば『御厄介を掛けたる上に煙草まで頂いては誠に恐れ入る』と床の上に置き僅かに八錢の『朝日』を出して喫ひ、又其居間には新しい緞通が敷いてあると『斯麼温かい結構な物があるのに座蒲團は勿體ない』と何に勸めても敷かれなかつた、又主人の心配にて絹夜具を出せば之れでは安々と寢れないとて、遂に木綿の夜具と取換へられたりと、演習中の辨當は竹の皮包の握り飯しとて、此度の出來事に竹の皮は服部方の記念の重寶とせりとのことです、實に軍人として模範行爲であります、將軍の生活は極めて簡單なるものにて學習院長にある俸給は或人に預けて入用の際に貰ひに行かれしと、又常に所持せられし懷中時計の如き舊式にて二十二形位にして簡單な紐にて、紐ばちぎれて一二箇所

の結び繼いであるのでした、彼の英國皇帝の戴冠式に宮殿下の隨員として參列せられた
る時も、上着を脱ぎたるときは半袖の縮みのシャツ一枚となつておられた、其シャツに
は汗が赭くにじんで居られたといふ、さても書き列ねば澤山ありますが、將軍の飽迄
も日本中心君思ひの精忠の武士、嗚呼乃木將軍の一家は國家に貢献せる楠公一族に勝さ
れりと或る殿下も賞讃せられたりと申します、實に感心の外はないのであります。

第十八、貞女烈婦の最後

靜子婦人の最後……木村重成の妻女……菊池武時の妻女……現代虚榮心の矯正

前章は乃木將軍の逸事を述べましたから、本章は乃木將軍の令夫人靜子樣の事を譚りま
す、婦人としては稀なる氣丈な方でした、男ならば當よりいざと言へば隨分勇氣のある
ことをなしますから、さのみと思はぬときもありますが、いやさて靜子樣は御婦人とし

てあつぱれなる最後でありました、この物語りせんも實に涙となります、其最後は如何
でありしかといふに、第一期の喪服にて鈍色の袿に柑子色の袴を穿いて居られた、自
殺に御用ひになりし刀は一尺餘の懐劍で銘には月山貞一とある、是れは明治二十七年頃
に鍛へられたる新刀で白鞘に納めたものであります、創は四ヶ所であつて、一箇所は創
といふ程でもありませんが、第一の創は胸の眞中を刺して居られますが、胸骨がありま
すから深く入りてありませぬ、第二の創は右の胸骨の脇をさして居ます、深さは一寸五
分位にて肺を刺し、心臟の一部に觸れて居ます、併しまだ死に切れなかつたのです、大
抵の男子でも其邊までやれば、我慢しきれぬものでありませぬが、然るに夫人は我慢し
て劍の身を握て、左の胸の心臟部に當てられたが、もう刺す力がないから、身體で以て
其の上に乘り懸り身體の重量で、懐劍を心臟に突き通したのであります、其の壯烈なる
有樣は驚くばかりで實に美事な最後であつたのです。

あゝ堅き決心を以て良人の最後を見屆けた上に、雄々しくも心靜かに、從容として死に就かれたは平素から十分の修養が出來てありましたからです。

夫に就て聯想するのは、彼の木村重成の妻女であります、夫重成は大阪城の大戰の際我夫に功名手柄をさせたき切なる思ひより我身を犧牲に擧て潔よく決せんと、一室に入て覺悟の一節を書き終り、之を陣中なる夫の許に送り屆け徐に自刃して相果てました、時しも花は盛りの十八歳を名殘となし實に健氣な擧動であります、其一節の手紙はこうであります。

一樹の影、一河の流、これ他生の緣と承り候にこそ、そもおとゝせの頃よりして偖老の契をなして、只影の形に添ふが如く思ひ參らせ候、この頃承り候へば、この世限りの御催しのよし、かげながら嬉しく覺へまゐらせ候、唐の項王とやらむは世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名殘を惜み、木曾義仲は松殿の局に別れを歎くとやら、

さらば世に望み究めたるわらはが身にて、せめて御身御存生の中に最後を致し、死出の道とやらんにて、待ち上奉り候、必ず〳〵秀頼公、多年海山の御鴻恩御忘却なき樣願上まゐらせ候あら〳〵めで度かしこ。

と、美事なる筆跡遺して自刃せられたのです。

其他南朝の忠臣でありし、菊池武時も、

故郷にこよひ限りの命ぞと知らでや人の我を待つらん

の一首を遺して戰死するや其妻は、

故郷も今宵限りの命ぞと知りてや人は我を待つらん

と讀みたる如きは、世に婦女としての鏡ともなり模範ともすべきことです。

當節は取分け虛榮心が嵩みたる事とて識者の歎き居るときなれば、女子としては一層の貞節はありたきものです。

第十九、謙遜美德

醜美の二女……謙遜の金言……俚諺……古歌

支那に陽朱と云ふ人あり、用事がありて宋といふ國へ行き、旅宿に泊まられたが、其の旅館に二人の下女がありて、一人は非常なる美人であり、一人は頗る醜婦でありました然るに美人の方は甚だ粗服を纏ひ、醜婦は反對に非常に、美麗なる服を着てゐました、陽朱と云ふ人は餘り不思議ながら、亭主を呼んで右の譯を尋ねたら、主人答ふるやう、御尤もなる御不審である、あれの二人の衣服は私が仕着たではなくて、皆御客樣より貰ふた御金で勝手にこしらへた衣裳でありまして、美人の方は己が器量を鼻にかけて人をあしらうことが粗末なによつて、人が金を惠み下さるが少ない、それに反して醜婦は自分の器量が惡いから人のあしらいを叮嚀にするから、人は自然に澤山金を惠むことにな

ります、それであの通り美服を纏ふことになりましたと主人は物語をすると、陽朱は成る程と不審をはらしたとあります。

慢は損をまねき謙は益を受く、と云ふのはこれらの事實をさして云ふのであります

柳枝長すれば愈低く　稻實熟すれば地に伏す

これは謙遜の德を柳の枝と稻の實に譬へたものでありますが、頗る面白き譬です、謙遜輕侮驕傲の反對にて、已れを愼みて人に驕らざることであります、柳の枝が長ずれば長ずる程低く垂れ、稻の實が熟すれば熟する程地に伏す如くで、人は智識が進めば進むほど謙遜をすると云ふ意です、俚諺に、

驕る平家は久しからず　出る杭は打たるゝ
負けおしみ出世のこやり　桂馬の高飛び歩の餌食

とある如き、又、古歌に、

滿ば損を招き　謙は益を受く
天道は弓を張るが如く、高きものは之を抑へ卑きものは之を擧ぐ
上に居て驕らざれば高ふして危うからず

とある如きは、皆謙讓の戒とすべき教訓であります。

第二十、質素と直言

土井利勝の質素……大婆殿の直言……秀政の儉約……節儉と咨嗟

徳川幕府時代に大老職でありし、土井利勝氏は大層な質素を守もられた方で、或時懇意の諸大名に向て、『近日の内茶をまゐらせたければ御出下さるべし、』と案内したので諸大名大に喜び、日を期して其到るべきことを約した、さていよ〳〵其日になりて諸大名連れて利勝の邸に至ると、利勝これを門内に迎へ、先づ書院に請じ、次ぎて茶室に導き、

自ら茶をすゝめて、歡待を極めましたが菓子は唯小さき重箱に粗末なる餅を盛りたるに過ぎませんでした、之れを見たる諸侯は啞然として互に顏を見合せたのでした、古人の儉素にして無益の奢りを爲さゞりしことは實に恐れ入つたものであります。

大婆殿と云ふたは、徳川秀忠の乳母でありました、年老ひて後は安樂に暮して居られたが月に一二度は下女下男を臺所に召し入れて手づから飯の給仕をするを此上もない樂みとして居られた、或日、いつもの如く下女下男に給仕して居られた際に、幕府の老中本多正信が、おとづれてこのさまを見て大に驚き、『人をも多く使はるゝ身の、かゝる賤しきものゝ給仕をなさる振る舞ひは何事であるか』と、云はれたれば、大婆殿姿勢を正し杓子を止めて正信に向ひ、御身は近頃奢りてをらるゝと聞いて居たが、只今の一言にて實にもと思ひあたりました、妾は三河の數ならぬ者にての娘、わづかの客に一飯をすゝむることもすら叶はぬ程の身でありましたが、はからずも將軍家の御恩によりて、今は

富貴の身となつたのであります、それでありますから、せめては昔を忘れまいと思ふてかくは自ら給仕をなして馳走をするのであります、御身は元の彌八郎の時の身分を忘れたまひしか、そうした心であつては天下の政事も覺束ないと』直言せられたので、正信も顔を赤らめて退いたとあります。

越前國の大名で、堀秀政侯といふ、大層德望な方がありましたが、その弟の多賀出雲守といふ人が、兄さんと仲が惡くなりましたので、越前國を逃げ出された時に、秀政侯は、その事を聞かれて、流石に骨肉の間柄の事とて、『定めし旅費にも困るであらう』とて、黄金十枚を取り出し、使を飛ばせて、之を弟に送られた、その時黄金を包んだ一枚の紙をば、自分で皺を延ばして、これを丁寧に箱の中へ收つて近侍の士に向つて言はく、『一體儉約といふものは些ばかりの事にケチ〳〵するのでなく、使ふべき時には十枚の黄金も惜まず、入用でない時は、タツタ此の一枚の紙でも使はないといふやうな事

を言ふのであるから汝等、決して予を吝嗇坊だと思うてはならぬ』と、懇切に教訓せられましたので初めは心の中で、大名にも似合はない吝嗇なことだ、と思ふて居た近侍の士方も非常に感服したといふことであります。

第二十一、儉約の貴重

二宮尊德の訓話……水戸公の託事觀……儉約の西諺……大納言治貞の教訓……古歌

今日本の國も澤山の外債があるとのこと、されば國民として心配せねばならぬ大事なことなので、其れゆへ互に無駄なことをせずに節儉をせねばならぬゆへ、儉約質素の御咄しをしましたが、今モー一度御咄しを致します。

彼二宮尊德の語訓に大層なる利益なことがあります其語に、

大事を爲さんと欲せば、小なること怠らず勤むべし、小積りて大となればなり、凡そ小

人の常大なることを欲して、小さなることを怠り、出來難きことを憂ひて、出來易き事を勤めず、夫れ故に終に大なる事をなす能はず、夫れ大は小の積んで大となることを知らぬ故なり、譬へば百萬石の米と雖ども粒の大なるにあらず、萬町の田を耕すも其業は一鍬づゝの功にあり、千里の道も一歩づゝ歩みて至る、山を作るも一簣の土よりなることを明に辨へて、勵精小なる事を勤めば大なる事必ずなるべし、小さなることを忽にする者、大なる事は必ず出來ぬものなり。

水戸烈公の託事觀にも

飯を得るときに兵糧の粗々しきを思ひ、
衣を製するに甲冑の究屈を思ひ、
居宅を構ふるに陣中の不自由を思ひ、
居起の安きに山野の苦みを思ひ、

父母妻子同席、兄弟親族に交るに遠國雜居の時の悲歎を思ひやりては、今日の無事安穩を大事とせば何ぞ奢を生ぜん。

因に儉約に關する西諺を示せば

節儉はそれだけにて資産なり、
節儉は一大收入なり、
節儉は德の母なり、
節儉は我が德の確かなる保護者なり、
世間未だ節儉の富たるを知らず、
財布の底を拂ひて後の儉約はおそし、
壹錢を貯ふるは二倍の利あり、
片錢を忽にせずば磅金は自ら成らん、
人の意に任ずる消費は其歳入を超可らず、
善き貯蓄家は善き働き手なり、
駑馬も食すること善馬と異ならず、
汗を出さゞれば甘きものを得ず、
根の苦きものに甘き果を生ず、

紀伊大納言治貞、曾て家臣を訓めて曰く、

人馬を持ち武器を用意し役儀の勤めを欠くまじきには節儉を守るに如くはなし、
而して節儉のもとは我身の不自由を堪ふるにあり、分を知て虚飾せぬにあり、
足るてふことを知らざれば遂に身をあやまるものなり、
とて一首を示す、以て之を嚴守せしめぬ、歌に曰く
　ことたれば足るにまかせて事たらずたらで事たる身こそ安けれ

第二十二、斯道の熱心

磯丸の歌道……善友を擇ふ……板倉勝重の友情……潔白の精神

何事でも熱心にやれば成功せぬことはありませぬ彼の歌道に尤も熱心でありし、三河國の磯丸といふ人、眼に一丁字もなき朴直漢なれど、或時伊羅古明神の社頭に於て一士人の歌道に就て語る所、大に感じ人として歌道に志せば天然の風韻を知ることができる

とて、其以來師に就て大に勉學をなして、少しの文字も知ることを得ました、然るに此の社頭にて語りし士こそは、これ明神の靈告なりとて深く信じ、それより精勵刻苦して純乎たる和歌を詠ずることになりました、遂に知られて其名嘖々たるに至つたであります、其先生始めての歌を詠んだ二首を擧げて見まする と、

　おれとこの田に蛙めが集りてひがな一日がやくくと鳴く
　誰やらがゆするやうしてばらくとこやしのごぶに櫻散るなり

實に天眞爛熳たるものでありませんか、之を當時磯丸に和歌を教へた師匠が評していふには、和歌には雅言俗語と云ふことがあつて、其許のよまれたは、丸切俗語であるから和歌にはならぬとて、之を雅言に改めて、

　わか門の小田に蛙の集りて今日もひねもすかしましく鳴く
　何人の手折りゆきけんはらくと池のみぎはに櫻散るなり

と詠みかへられたとあります、後には歌道の名人となりて世に知られのです。

人として善き友人はありたきもので凡て人は利のため名譽のために友人となりしは、眞實の友でありませんなんとなく心の底には、あたゝかき親切がなくばほんとの友にあらで實にさめやすいのです、彼の板倉勝重が所司代となつた時、或人が黄金三兩を拾ふて之を訴へたので、勝重が之れを通街に掲示すると其遺失主が出頭して、『我金を落して彼が之を拾らふは天の然らしむる所ですから、私は此金は取りませぬ』と云ふて固辭して受取らず、拾ふたものも亦受けず、相讓て決しないから勝重賞歎して云はく、『此れ所謂堯舜の民である、はからずも予が此世に生れて此樣な訴を聞くことを得たのは實に予の幸ひである、これを紀念として以後交を結ばんものと』、自分に金三兩を出し併せて六兩として、之れを三分して各二兩を取り、且つ云ふには『汝等二人は兄弟の如く親んで、如何なる事柄でも云ひたいことがあれば必ず來て予に告げよと、厚く慰めて

之れを還したといふことであります、かゝる潔白な精神を以て交つたら、其友愛の情は千古にかはるものでありませぬ。

第二十三、是非曲直

重宗の公平……重宗の茶挽き……唐の秦王の仁慈……仁君のため命懸け

人は萬事公平になしたいものであります、とかく依怙の沙汰をなし、我身びいきをなして私情に流を常とするものでありますから、彼の板倉重宗といふ人は公平の裁判をなすに名高い人でした、豫て京都の所司代となりた時、重宗は或人に問ふて云ふには、「吾訴訟を裁判するに就て外の人はどのよふに云ふておるか」、と

其人答ふるやう、『左樣であります貴君の威嚴が顏にあらはれて居るので、人々が恐ろしがつて充分に意中をのべませぬ』、と答へたれば『重宗は左樣かそれは我の過失である』

といつて、それ以來は役所に出る度に障子の内に茶臼を置て、先づ西の方を向ひて御拜をしてから、座について茶を挽きつゝ訴訟を聞て居られて決して障子を明けなかつたのであります、或る人は不思議に思ふて其譯け柄を尋ねると、重宗が云はるゝには『すべて訴訟を裁斷するには私の心があつてはならぬ、それで西に向ひて先づ最初にお拜をするのは、愛宕山の神に祈つて私の心の起らぬやうにするのである、心が靜かであれば明かになつて來るし、明らかなれば理非曲直が自ら見へるもので、それで茶を挽て我の心を試驗するのであります、茶の粗いのと細かいのとは、手の早いのとおそいのとによるのであります、手の早ひのとおそいのとは心の靜かなると騷がしいのとによるからであります、誰れでも人の顏と云ふものは一樣でないから、可愛らしいのもあれば又憎らしいのもあります、此方に愛憎の情がおこれば隨て偏頗の處置をするやうになりますからそれで障子をとぢて人の顏を見ないのである』、と箇樣に公平を旨とし、是非を裁判され

たから、四十年餘りも奉行職をつとめて、天下横行の盜賊共の跡を絶つに至つたのであります、故に後世に吏治を云ふもの必ず板倉父子を擧げて、其の公平の德を稱へぬものはないのであります。

情けのある君と情のない君とはその下に居る臣の幸不幸となるものです、唐の素王といふ王樣は、或年の秋、臣僚百官を召し、夜會の酒宴を開かれた、臘燭に火を點じて晝尙あかしと、和氣陽々共に天下の泰平を祝ふて居られたが、折しも吹きすさむ秋風のため御殿の燈火が一時に消ゑてしまい、歌舞管絃の樂しき宴會場は、忽ち黑白わからぬ闇黑世界となりました、處が年若き臣下が、酒興の餘り闇にまぎれて王妃の袖を引いた、其時王妃はすかさず臣下の手を捕へて、冠の左の片方をたちきり、王樣へ申し上らるゝには、只今この闇に乘じて妾の袖を引た無禮ものがありましたから、其のものゝ左の冠の紐を片方きりておきました、早速これを證據として御詮議を下されよ、と申上られた、

そこで今の年若き臣下は如何に酒興とは申しながら、王妃に無禮をなしたが我が生涯の過失、誰を恨むる樣もなし、今を限りの我が命と覺悟を極めて居ると、王樣は暫く蠟燭の火をともすを見合せよと仰出され、臣僚百官皆冠りの紐を片方づゝ切りすてよ、若し切らぬものあらば、夫こそ直に入牢申し付けるぞとの御意がありました、そこで臣僚百官は各冠の紐を片方づゝ切り捨てたサア火をともせよとありて、蠟燭の火は元の如く滿塲を照しましたれど、王妃の袖を引いた無禮者は誰のしはざともしれぬ、そこで徒らものは良心があるから、王樣の御惠みの深きに感じ其以來君のため命懸けに働き報恩をなしたりといふことです。

第二十四、彼我不二

兆殿司の師事……畫學の熱心……師匠の教訓……天下の佛畫師

有名なる兆殿司は、聖一國師の弟子でありますが、幼少の時より畫が好きで、毎日々々飯焚役を云ひ付かり、竈の前にて火を焚きながら、火箸で灰をかきならし、畫ばかり書いて居ますから、飯が何時でも焦げる、其度にいくら切諫しても何の効能もなく、矢張こがします、師匠も堪忍囊の緒がきれて、非常に立腹して、『師匠の云ふ事をきかぬ奴は、一日も此寺に置かぬから、早速出てゆけよ』と叱られますと、兆殿司は涙ながら兩手をつき『恐れ入りました御師匠樣、此後は決して畫は書きませぬ、決して飯は焦しませぬ、何卒々々御勘辨を』とあやまりますゆへ、『然らば此度は許してつかわすが此後再びこんなことがありたらば承知せぬぞ』といはれたれば『兆殿司は有り難うござります』と、臺所へ下りましたが、翌朝臺所に焦臭い香がする、ハテ困りた奴ぢや昨日あれほど叱りておいたに、又焦したかと、聖一國師が窃に障子の隙間から覗いて御覽なさると、不思議なるかな、竈の前に炎々と燃ゑ上る猛火の中に、不動明王が利劍を執て御立なさ

れてある、サテ〳〵難有や、生身の不動様を拜み奉るは生れてより初めてゞあると、珠數さら〳〵と押もんで不動明王の呪文を唱へて御座ると、忽ち不動様の御姿がかき消す様になくなりて、兆殿司はあわたゞしく火をもみ消して居ります、聖一國師は不動明王を拜んだことの難有さに、其日は何の小言もなかりしが、又候、翌朝も焦臭ひ香がするから、障子の隙間から覗いて御覽になると、今度は竈の前に大きな牛が寢て居ります、コハ如何にとよく〳〵見れば奇怪千萬、其牛の頭は兆殿司である、聖一國師は非常に驚かせられて『兆殿司〳〵』と呼ばせらるれば、又叱られることかとおづ〳〵方丈に參りますると聖一國師は涙ながら『不愍や汝ほ畜生道に落ちておる、如何に愚鈍な生れじやとて、三衣一鉢の身の上となりしものが畜生道に落たとは可愛そうなことである』と意外の仰せに兆殿司はビックりせられ『何を仰せられまする』、私は御承知の通り愚かなもので御座りまするが、畜生道へ落た覺へは御座りませぬ、何を證據に御意あそばす』

と問はるれば『去ればの事今障子の隙間より覗いてみれば、竈の前に大きな牛が寢ておる、コハ怪しからぬとよく〳〵見れば、體は牛ぢやが頭は汝の頭でありたぞよ、昨朝飯の焦げた時は、竈の前にて生身の不動明王を拜み奉り、アラ有難やと昨日一日喜んで暮したに、今朝は悲しや自分の弟子が生きながら畜生道へ落るとは』この御歎き聞く兆殿司は兩手を打ち、あゝ難有やと躍りあがりて喜べば、聖一國師は大喝一聲『馬鹿者め、畜生道におちて何が難有い、何が忝と叱られば、『これには深い譯が御座ります、一通り御聞き下されませ、昨朝は火を焚きながら、灰掻きならし一心に不動尊の御姿を書て居りました、唯今は牛の姿を書て居りました、此の一心が徹到して、私の姿が牛ともなり、不動ともなりたので御座りませう』と申上れば、聖一國師も感心せられ、是より汝一心に十分書道を勉強し、諸佛菩薩の尊像を書き奉り書道を以て衆生を濟度するがよいと御ゆるしになり追々出世して古今無類の大家となられました、一心の働きはひど

いものであります。

第二十五、幸福とは何を言ふや

蛻岸翁の講義……生徒を誡む……光明皇后の銘句

蛻岸翁といふ儒者が、學問には尤も忠實なる方である、先生の住居の家屋は粗造なもの瓦は飛び壁は落ち柱は曲み敷居は朽ち一たび雨が降たとすれば、それは大變なことで講釋中に見臺を持ち乍らあちらの隅こちらの所に、持ち運ばれて、雨もりを除け〳〵講釋をせられた、所が其講釋中に先生說て曰く

『人は幸福を求めねばならぬ、幸福は我身の王さんである、如何に學問をし字を能くしり能く書くものあるも、我身の幸福を得なんだ時は、其の學問文字は皆な本箱の虫である、何の所詮はない。

生徒等此の言を聞て、はてな妙な言を譚さるゝかなと、御自身御住の家は、實に見る蔭もない雨露の凌ぎだも出來ぬ家屋に住みて、何にが幸福である、幸福とは金錢に貯へ着るに衣服あり、食ふるに足り、住むに不自由のなきこそ眞の幸福なれ、生徒等は竊かに笑ふておる先生はチラリと聞き、俄に容ちを改め生徒等に誡めていふ。

『皆なのものよく聞くべし、幸福といふものは、强ちに金錢財寶ばかりでなく、たとひ金は澤山あり、財寶は山程あつても親子親しからず夫婦睦じからず、人には不義理をするやうなことでは犬猫に錦を着せ、牛馬に金錢を負はせるやうで、眞の幸福といふものではない、たとひ我身は貧くとも、他人に不義理をかけたることなく、親子兄弟中よく、上を敬ひ下を憐み、一家和合して笑ひと諸共に日送りするを即ち人間の幸福と申すものであると懇に教誡せられたれば、生徒も實に道理なりと感服したりしといふことです。

光明皇后といふ明妃は、天下の智者でありますことは、誰人もよく知る所の通りですが其座右の銘として、禁中の御襖に、

清貧は常に樂み濁富は常に憂ふ

と云ふ古語を御書きなされて、常に御覽あそばしたといふことです。

實に此の古語の如くで、身はたとひ貧くとも心が清淨無垢なれば常に樂みがあります、幸福長者の生活をしても、心に邪曲がありましたら常に憂苦を抱いて悲泣すると少しもかわりませぬ、仰で天に愧ぢず伏して地に恥ぢずといふ如き、公明正大の心を以て日送りをするが人生に於ける最大幸福者と云はねばなりませぬ。

第二十六、誠意天に感す

觀月會……鴨長明の一首……國助の名吟……安倍仲磨の名吟

西行法師の詠月……古人の月に寄する……他力本願の眞意

今日では月觀の會は餘りないようですが昔はなか〳〵盛大なことであつたのです、だから和歌とか俳句とか言へば月に寄せ詠みもし書きもするのでありました、昔から月に付ては奇話珍談は澤山あります。

曾て禁庭に於て觀月會を開きしが、それそれ雅人風流の名士は集つたが肝腎のお月樣は村雲に覆はれて、月觀する事ができませぬ、さても情けなきことゝて、今宵八月十五日は明年まで亦來らずと歎くもある恨むもある然るに此の曇る月見を何にか照らす詮もなきやと、此の時座中一首を詠ずる聲がしました。

吹きはらへ、我加茂山の、峰あらしこはなおざりの秋の空かは

と鴨長明が讀みたれば、不思議にも村雲霽れ渡り、一天に鏡を掛ける如く照り渡りました、座中感心せぬものはなく、其歌の妙なる力らを讃賞せりとの事です。

彼の住吉の神主津守の國助も、觀月の夜折角の宴會も曇りはて、その興もなければ一筆さら〳〵と書き染めたのですが、それは

よし曇れ、くもらば月の名やたてん我身獨りの、秋の空かは

忽ち月は心ありげに皓々と晴れ渡りましたと、名高き譚りが傳へられてあります。

安倍仲麿は彼の邊所に送られ、我古郷忘じ難き折り、月によせてあこがれたるは

天の原、ふりさけ見れば、春日なる三笠の山に、出し月かも

聞く人を泣しめ、見ものをいたましめたのです。

何にか我希望があつたが、其の希望を果せぬとて心うつ〳〵と喜ばなかつた、西行法師は月獨り嬉れしげにさへ〳〵照るものかなとて恨みげに詠んだは

なげきこて、月やは物を思はするかこち顔なる我なみたかな

天下の名歌として世に傳へられてゐます。

人生は樣々なるを、古人は詠みて

月ひとつ、影いろ〳〵の、おとりかな

『踊りかな』の句は、吾人心すべきであります。

信仰の上より詠めば、神を信ぜば神我を守り玉ふ、佛を信ぜば佛我を擁護し玉ふ。

水やそら、空や水ともわき難く通ひて澄る、秋の夜の月

こゝに眞理があるのです。

彼の淨土宗の祖師法然上人は、罪を蒙むりて讃岐の配所に趣き玉ふとき、尤も御因緣深かりし關白兼實公と御別れの際、月によせて其歎きを俱に慰め玉ふ、上人の詠に

月影の、いたらぬ里は、なけれどもながむる人の、こゝろにぞすむ

月影は彌陀の慈悲に例へ、賴む心の人々に平等一如に慈悲を以て救ひ玉ふなりと、他力本願の眞意を述べ玉ふのであります。

第二十七、寸陰を惜む

貝原益軒の篤學……太宗皇帝の好書……江泌の讀書
司馬溫公の熱心……ニュートンの勉學……論語の金言

勉學ほど大切なものはありませぬ、少時より老年に至るまで、人として必ず此心得なかるべからざることであります、大に讀書によつて修養の功を積み、又諸種百科の學藝に通じてそれ〳〵に身を立て世に處する所がなければならぬのであります。

貝原益軒は筑前の生れで、其人となり謙恭純篤なる方であります、壯年に至て京師に入り講學してから、其名が世間に廣ろまり、最も好んで書を著はし、老ひて愈々力め百餘種の多きに至つたが、大低皆な國字を以て書き、語を極めて懇切に、婦女童兒にまで能く解易いのであります、常に食事中と云へども片手に茶碗を持ち書籍に眼を晒しつゝ食事をして、寸時もゆるかせにせなかつたそうです、是れ天下に名を博した所以であります。

宋の太宗皇帝は書を讀むことを勤められ朝早くより夜遲くまで之に耽り後漸く卷を釋かれた、家來の采祖といふ人は帝は餘りに書を讀めば、勞瘁ありてはと諫めた所が帝は答へて、書を繙とけば益すること大にして縱令身は疲れ命はなくなるとも何ぞ厭はんや、而して詔して天下の遺書を求めたりといふことでした。

南齋の江泌といふ人も少時學を力め、家貧にして油なき所より常に月に隨ふて書を讀み月の斜となるや乃ち屋に昇りて書を讀み、其餘光と盡して終夜殆んど寐なかつたといふことです。

司馬溫公は、常に一室に閉ぢ籠つて書を讀み、書は悉く机の上に盈ちて居た、或は馬上にあつて閲し、中夜寢ずして文を誦し、其義を思ひ、圓い木を以て枕らを作り、之れを警枕と稱して、眠る時は即ち枕が轉がつて目を覺めるようふにし、復た起きて書を讀

んだといふことです。

ニュートンは樹果の落下するを見て、地に吸引力ありて斯くなる事と悟り、是に由て日月運行の理を悟つた有名なる學者でありますが、或人が嘗て『如何なる工夫に依て斯くも大なる發明を得玉ひしや』、と問ふた所が答へて曰く、『常に此事を思ふて居たから出來たからである』と實に熱心勉學は驚いたものでありませんか。

實に勉學は貴きものであります、論語には『學んで時に之れを習ふ、亦悅しからずや』とあり又『吾嘗て終日食はず、終夜寢ねず以て思ふ益なし、學ぶに如かざるなり』とあります。

朱子は凭う云ふてゐます、

少年易レ老學難レ成　一寸光陰不レ可レ輕　未覺池塘春草夢　階前梧葉已秋聲

第二十八、感化の偉力

熊澤蕃山の初笈……馬夫の正直……中江藤樹の訓陶

感化ほど勢力のあるものはありませぬ、最も教育上に必要なるもので、若教師の人格が高く德が篤いならば生徒は自然に之に薫化せらるゝのであります、古來聖賢の門に立派な人物の出たと云ふのも全く師の感化を受た者であるのです、熊澤蕃山が初め笈を負ふて、良師を求めんと京に上つた時、偶々某と一宿を共にされた四方八方の物語の序、其人語るらく。

『往日余は主人の爲めに、金貳百両を懷にして遠く行た、途、驛馬に乘り、其金子を鞍に繫いたまゝ忘れ置き宿に就た、一睡の後覺めて此事を思ひ出し、サー大變と大に困却し、只だ茫然として夢の樣であつた、いよ〳〵考へて見れば確かに彼の驛馬の鞍に結

び附けたまゝ、忘れたのであつた、然し之を求むるに由なく、痛心苦慮しても詮術なく死して主人に謝せんと決心した、折しも戸外に訪れて戸を叩く事甚だ急なる者あるに依り、之を問へば則ちさきの馬夫である、馬夫は其時件の金を出だして、『家に歸りて馬を洗ふとして鞍を解いた所が、此金があつた、之れは慥に君が遺失されたものと思ひ、還しに來たのである』と告げた、是に於て予に再び夢かと打ち驚き且つは喜び、早速腰に帶せる別封拾六両を其儘投げいだして、聊か謝禮の志を馬夫に贈ると馬夫は頭を振り、『君の物を君に附するに何の禮をか要せん、然れども其爲めに夜を冒して來たのであるから、其賃金二百錢を得れば足る』、と云ふて固辭した、そこで予は之れを遮ぎり、『譬ひ此金子は予のものとするも、一旦之れを遺失して、若し汝の義心がなかつたならば、已に此の地に生を全ふする事が出來なかつたのである、されば汝は予が命の親にして、之に報ゆるに十六両を以てするは甚だ僅少ではあるが、然し聊か予が寸志を表する

もの、願くば速に收めて吳よ、と告た、然るに馬夫は尙ほ固く辭して受ず乃ち減じて八両として呈したが、尙受けない稍々減じて二両に至つたが、馬夫は益々固く執つて受けず『君よ我を困らす勿れ我れには守る所あり、そこで予驚き『今の世の中に多く見ざる所である、抑々其守る所とは何事であるか』、と問ふと私の如き賤業によつて口を糊する者は、決して利を思はぬではないか、我村に中江藤樹と云ふ人があつて村中を敎授して居らるゝが、其人の言ふ所を聞くに誠正以て其身を修め、君に事ふるに忠を致し、親に事ふるに孝を盡し、貧を以て濫る事なかれ、賤を以て枉る事勿れと、示されて居る今君の賜ふ所を以て之れを利せば即ち此心を欺くのである』、と云ふて、遂に之れを受けなかつたが今の世の中に果して此人の如きがまたとありましようか、と物語つた蕃山之を聞いて『馬夫はたゞ一鄕の賤夫のみ、素より道の何物なるかを識らぬのである、されば利を見ては走り敢ねて義を思はぬものであらう、然も其廉潔君子に愧ぢざるは敎育の致す

所で、以て中江氏の德と學とを想ふべきである、今世、此の人を捨てゝ誰にか適從せんや』と、乃ち即日束裝して、中江氏に謁を求めんと赴いたのであります、これ藤樹の感化が其の人里に及んだ徵證であるのです。

第二十九、訓陶の勢力

藤樹先生の德化……三輪先生の驚歎……藤樹先生の盜賊の感泣

前章には感化といふを、陳べましたが、中江藤樹といふ先生が、里人を訓諭した力は實に感心なものであります、嘗て里人の驛に使する者があつて、賃錢を受け、貳錢餘分を受けて居たので、乃ち追ひ行く事數里にして之れを還した時、其の人曰く、『汝は何故左まで廉潔であるか』と、答へていふ『敢て然るにあらねども、貳錢の微も之を私は鄕里に容れられぬ』と、これ小川村の實際であつた、又嘗て藤樹先生が京師葭屋町一條邊の

別莊に赴く途中、行々驕中にあつて心學を說くや、驕夫は感動して流涕するに至つたと云ふ、其德化の人を感ぜしむること是の如きものがあつたのであります、されば鄕人は藤樹に親しむ事親の如く、尊むこと神の如く、竟に推尊して佛子と云ひ、名聲大に顯れ一時稱して近江聖人となした享保年中、陽明學者なる三輪執齋が、小川村を過ぎ、藤樹先生の墓を弔はんと欲して路を農夫に問ふた、すると農夫は鍬鋤を捨てゝ屋內に趨り入り、衣を改めて出で之を案內した、三輪先生乃ち從ひ行くと、既に墓門に至るや、農夫は拜掃甚だ嚴肅であります、三輪先生が之を怪み、『汝ぢ藤樹先生に何の緣故がありて斯く敬禮をなすのであるやと問はれた、農夫は答へて『藤樹先生を欽仰するもの獨り僕のみでありません、全村皆斯くの如くであります、我が父老は每に其子弟に物語て吾里に父子禮あり、兄弟恩あり、室に忿怒の聲なく、面に和順の色ある者一として藤樹先生の遺敎に由らざるものはないと之が一人として其の恩を戴かぬものはなき所以でありま

す』、と、即ち墓前に拜し、農夫に謝して去つたといふ、又一貴人があつて嘗て藤樹の祠に詣いり、駕を門外に駐め、村老をして門を開かせて拜せんとしました、時に村老肯かずして曰く『凡そ廟に詣ずるものは門を去ること百歩にして、輿を下り、蹙々入つて堂下に拜すること貴賤一であります、然に今肩輿を石砌に接して戸を開くとは偖も亦甚しい事であります、之れ神に奉ずる道にあらざる故、敢て命を奉ずることは出來ぬ』と申しました、貴人は之を聽て大に驚き謝したが、村老重て曰く『既に晩し、再び日を期して來り拜せよ』と急に去つて顧みなかつたと云ふことです、又藤樹先生嘗て夜、郊外より歸る途中に、賊數人突如として村中より出で、途を遮て曰く、『客橐を解き以て我が飲酒に供せよと、藤樹先生即ち二百錢を出して之れを授けました、すると賊は刀を拔ひて叱して曰く『客に求むる所は豈に之のみに止まらんや、速に衣服佩刀を出せ、然らざれば則ち多言を待たず』と、藤樹神色自若として徐に曰く『少しく待て、吾其

授くると否らざると何れ是なるかを慮らん』と稍々暫く瞑目してあつたが、『我今之を慮るに、譬ひ戰ふて利あらずとするも輕々しく汝に與ふる理由がない』と即ち刀を撫して起ち、『戰ふものは必ず其姓名を以て相告ぐ我は近江の人、中江與左衛門である』と云ふた、是に於て賊大に驚き、直に刀を捨て拜謝して曰く『弊郷五尺の童と雖も藤樹先生の聖人たるを知らざるものなし吾黨强奪を以て生活すると云ふとも、豈に之れを聖人に施す事を得んや、願くば先生知らざるを矜みて之れを宥せ』と藤樹先生之れを諭して曰く『人誰か過まちなからん過て能く改むるは善の最上なるものである』と云ひ、知行合一の理を說て示したので、賊感泣して其黨民を率ひて良民となつたとあります實に美しき譚りでありませんか、あゝ感化の力亦大なりといふべしです。

第三十、細心注意

歳暮の感 則……塚原卜傳の教訓……悔悟の警言……用心の金言

何事でも人は豫め心を用ひて粗漏過失のなきやうにせねばなりませぬ、總て失策をなし失敗を招くといふのは皆物事に放心して居るからであります、此放心を收めたならば萬事成功することは聖人も教へて居られる俗に『用心に繩を張れ』といつたのも、自己を顧みて心を用ひよと諭したものであります火の用心といひ、泥坊の用心といふ、皆これ小事を慎まねば大事に至ることを戒めたものであります、死の覺悟の如きも、これ亦人生に取りての一大用心であります、俚歌に

後悔を先にたゝせて後から見れば杖をついたり、轉んだり

實に用心のなき姿こそは見苦しいものであります。

塚原卜傳といふ劒道家がありましたが、三人の子供をもたれた、皆能く劒道に達して居られた、卜傳先生は嘗て、三子の技倆を試して神蔭流の秘法を授けようと思ひ、一つの

小さい枕を、戸幕の上に置き、人が少し觸るゝと直に墜ちるやうにして、事に托して先づ長子を呼ばれた、長子は命に應じて至り、豫め視て物あるを察して、戸幕の上の枕を承けて戸の側へ置き、入り來りて故の如く靜かに置く、第二子は召されて、將に入らんとして幕に觸れ、其飜墜するを兩手に承けて復た故の如くした、次で季子は召されて來り、俯して入り、枕の墜て頭に觸るゝや驚いて劒を拔き、枕が地に着かぬうちに切つて兩斷としました、さて各座に着くや、卜傳先生は、一刀を長子に授けて曰く、『汝能く其器に堪へたり』、と二子に向つて、『汝能く勉めよ』、と云ひ、季子を誡めて『汝早刻此處を去れ、汝は必ず家名を汚すものである』、と云はれたりと、實に其の心を用ひられたのは感心であります。

或る人の示しに人に六ツの悔ゆと云ふ事があります。

一、官に在つて曲り、職を失ふ時悔ゆ。

二、富時に儉約を用ひず、貧になりて悔ゆ。
三、藝を學ばず、勤めに至りて悔ゆ。
四、見て學ぶ事を學ばずして、用ふる時に悔ゆ。
五、醉時の狂言醒て後悔ゆ。
六、常に不養生にして病める時悔ゆ。

又人のそこなふに六ッあるといひます。

一、大酒大食は胃腸をそこなふ。　二、色慾淫亂は腎をそこなふ。
三、喧嘩口論は身をそこなふ。　四、家業粗末は家をそこなふ。
五、金銀放埒は寶をそこなふ。　六、我人不和は交をそこなふ。

火の用心　（堪忍大明神を信ずべし）

つゝしめよほたる程なる煙草火のこゝろゆるせば早がねの聲。

恐るべし愚痴と短氣の胸の火が我れとわが身をこがすやきもち。

非の用心　（家業如來を信ずべし）

よこしまの非をばおそれて正直を守る人をば神ぞ守らん。
恐るべし非がふりかゝる困窮は己が非道の非がせむるなり。

邪の非の用心　（正直の大明神を信ずべし）

愼みを人の心の根とすれば言葉の花もまことにぞ咲く。
恐るべし是を是とせざる邪は、己が身をやく非にぞありける。

慾の火の用心　（知足大明神を信ずべし）

恐るべし慾のほのほはゝげしくて我身も家も人もやくなり。
足る事をしりからげして身を輕く慾のうすきに福と壽とあり。

第三十一、廉潔高崇

小島先生の官私公明……蕉園の芳躅……古人の格言

廉勤といふことは大切なることで、廉潔の心得を持ち、廉恥の振舞を以て、已が從事する官衙公司の義務を盡すことでありますと、兎角權勢ある地位に在る者は、其地位を利用して不正不義の利を貪り、或は請托を受け賄賂を收めて、自家を肥すことを計るものでありますが、是は法律の禁ずる所であつて、一朝露顯すれば忽ち累縲の辱を受けねばならぬのであります、されば官吏たるものは、平生愼戒を加へ、廉潔にして謹直方正に其職務を執行ふ所がなくてはならぬのであります、小嶋蕉園といふは江戸の儒者でありましたが、資性淸廉にして、喜んで書を讀み、文を善くして其の名を轟かせられた、若き頃代官職を勤めて甲州に赴いた、甲州は大變治め難い所と能く響いて居たが、蕉園は

任にあつて勉めて淸勵克く治を講じたのでありました、民の福利を計り子弟を敎養したれば、數年の中に民能く廉き、皆蕉園を神明の如くに服しました、後蕉園は同僚の嫉む所となりて官職を辭し、醫を磯野公道に學んで、人の治療を乞ふものあらば、即ち藥囊を携へて親切に藥を與へ診察をなしました、されど廉潔なる蕉園ゆへ少しの餘裕はなくして、家常に貧苦に暮し、僅に風雨を凌ぐ陋屋に住し、妻を迎へずして老母と共に和氣靄々として樂んで居られた、此時甲斐の人民相寄つて、我等今日あるは全く小嶋氏の德である、聞けば先生は頗る貧困に陷つて居らるといふ、我等之れを默視する能はずと、遂に三人を選び衆に代つて百金を携へ、江戸に至りて蕉園を問ひ之れを送られた、時に母出でゝ驚き謝し『我が兒は決して人の惠みを受けぬから、必ず辭するであらう、然し今は不在であれば、兎角歸つて來たら能く相談しやう、それまで預つて置くから、明日また來れよ』とて三人を還した、まなく蕉園は歸宅して母の言を聞き『近頃世間の人情

紙より薄きに反し、甲民は厚情實に感ずべきである、併し之を受けては廉恥を破る事になる』と云ふて、母に相談すると、母は『固より其通りであるが併し彼等の志を傷つけんを恐れ汝の歸るのを待つて居た』、蕉園乃ち『然らば明日彼等を饗應しやう』とて酒肉團扇を買ひ調ひて、三人の來るを待つて居た、頓て三人至つたのである、之に座を與へ、頗る優待饗應して往事を談じ、且つ團扇を送つて、昨日彼等が送つた處の金を卻けて諭して曰く『汝等は我を見捨てずに、暑さを冒して特に我が究居を訪ふてくれたのは、實に謝する言葉もない、併し我先きに施した所の者は、官命であつて、私の惠みを行ふた譯ではない、故に民にあつては、私に報ゆる必要はないのである、吾れにあつて私に受ける理由はない、而して吾れは藥を賣つて貧しい乍らも母と二人で安樂にくらして居る安心するやうに衆に謝せられよ』と云ふて金を返された、三人之を强たけれども、遂に受けない、是に於て三人は止むを得ず、金を懷にして歸り、再び衆と共に協

議をなして、其の金を捐てゝ、蕉園の生祠を建てゝ永く先生の芳躅を忘れなんだといふことです。

松が枝の直な心を保ちたし柳の絲のなびく世の中

薫中舒曰く　其義を正して其利を謀らず、其道を明かにして其功を計らず。

土漁之曰く　仕官は常に其不遇を以て之に處せば即ち無事なり。

第三十二、三の妙符

三種神器……三身……三世……三寶……三學……三明……三毒

三種神器

八咫鏡　鏡は物を照らす德を有せり、されば照らすは智慧のはたらきである、是非善惡の理を明にしろしめす理を、鏡によらせられ玉ふ、國民また君に仕ふるは鏡の

如く明らかにして、自分の職分を觀る亦鏡の如く明らかでなければなりませぬ。

八阪瓊曲玉　玉は柔命善順なもの又やさしきもので、即ち仁愛であります、民をいつくしみ玉ふことは玉の如く、御仁慈にあらせ玉ふことは申上るも畏こし、國民互に仁慈の心がなくてはならぬ、玉の如くすなをでやさしけねばなりませぬ。

叢雲劍　劍は剛利決斷なもの、即ち堅忍持心を盡させ玉ふことは、劍の如く御勇氣にましまして、物に御決斷にあらせ玉はねばならぬも畏しけれ、民に於ても物に當て堅忍持久國のため勇氣を奪はねばなりませぬ、決斷劍の如き働きがなければなりませぬ。

三身　とて佛法では佛の躰に就き三ッあることを示してゐます。

法身佛　此れは誰れしも具へて居る、即ち木を割りて見よ花のありかをで、事にふれて其佛の動きの起るものである、是れを如來藏とか眞如佛性とか云ふのであります

報身佛　因位の修行の報ひに德を得るのである、所謂阿彌陀如來は萬德が現はれて極樂淨土といふ土地を構へ玉ふ、釋迦如來は無勝莊嚴淨土を構へ玉ふ、これ過去に修因感果の報ひなる佛であります。

應身佛　これ化身佛ともいふ、衆生濟度のためいろ〳〵と身を變化して濟度し玉ふ、即ち機に應じて現はれ玉ふ故に應身佛といふのです。

三世　と云ふも、佛敎の立場である三世の理法を明かに說くは幾多の宗敎中獨り佛敎のみであります。

過去　我は何處より來るかと云へば即ち過去世の業因によりて生れ來たのである、近くは昨日は過去である、詳細に云へば一呼吸の內にあるのです。

現在　我は現在生れ居る、其場になす業皆現在なるべし、即ち今日が現在である、今日を過ぎて昨日と落謝するのであります。

未來　吾人の前き生これから生れ行かふとする所、人間一生終ると未來となるとせば今日といふを明日ありとさすが如く、現在のなしたる業因により未來の果報を招くのであります。

三寶　とは、佛敎に於ける尤も貴き寶を示したものであります。

佛寶　佛は三界を通達して、悟道に入りたる自由の力を得玉ふをいふ、して迷ふて居る總ての者を救濟せんと慈悲を得玉ふもの。

法寶　佛の悟道に入らんとせば、必ず佛の說かれたる法によらねばならぬ此の法には千差萬別にして機によりて無量の法門を說き玉へり。

僧寶　佛を信じ法を知ることは、必ず僧の說く力にあるなり、尤も僧に依て悟道に入るの先導者である、故に僧を寶とするのであります。

三學　とは佛道修行するには必ず三學を修養をせねばなりませぬ。

戒學　凡そ物には規律がある如く、佛の敎に入り悟道に登らんとせば、戒學をやらねばならぬ、これに依りて身を正しうしまた心を修めるのであります。

定學　悟道に入らんとせば丹田が入用で精神の靜思を練り、心の粗漏を止め全く寂定の境に入るのである、併し世の中は何をやるにも此學が必用である、此の沈思靜坐がなくば成功しませぬ。

惠學　一切の大法を開くに必ず智惠を要す、智惠の光明に依りて一切の妙理を通達するのである、實に大切ない學であります。

三明　精神界の自由なる位を謂ふのである此れは、自已の修養に因りて此の働きを得るのであります。

生死明　いき死にする程歎げかはしと、佛陀は悲むのである、此れ生れたら死ぬるの解脫を貫徹した所をいふ。

宿命明　吾人の前きの生は何んであるかを明に知るのであります。
漏盡明　吾は如何なる因縁によりて、此の人間に生れたのであるや、又父母兩親に對しては、如何なる關係がありしかを明らかに知るのであります。

三毒　法の教へでは非常に恐れるのである、何とならば。
貪慾毒　慾もせねばなるまいが此の貪り慾は正道を害し我身を亡ぼすものである、故に毒の名を付けたのであります。
瞋恚毒　たてるべき公道には腹を立てるもよしされど私情間に瞋ば人を害し吾身を損ねるのである、何をやるのも堅忍でやらねばならぬ、故に毒といふのです。
愚痴毒　物の理に冥ひ程恐ろしひ者はない、胸中暗黑であれば何に依て理を求むるや故に毒といふのです。

第三十三、偉人の遺誓

商賣の一枚起請文……茶道の一枚起請文……歌道の一枚起請文

元淨土宗の御祖師が、建暦貳年正月廿五日に御往生の其前々日に、御弟子の勢觀坊の依賴にて念佛の貴とき御遺言なされた、尤も名高き世に一枚起請文と傳へたるを、世の識者が肝要なる業務に準へて、一枚起請文を讀だれば、其の修養とする二三を擧げて見ますれば、

商賣に就きて讀んだる一枚起請文

もろ〳〵の人の沙汰申さるゝは、金溜る人をば、運のあるの、我は運のなき抔申は、愚かにして大なるあやまりなり、運と申す事は候はず、金持ちにならんと思はゞ、酒宴、遊樂、奢を禁じ、長壽を心がけ始末第一に商賣を勵むより外に仔細は候はず、此の外に

貪慾を思はゞ、先祖の憐みにはづれ、天地にもれ候べし、始末と吝きと違ひあり、無智の輩は、同じ事と思ふべきが、しぶき光は消へうせて始末の光明みちぬれば、十萬億土を照すべし、かく心得て、行ひなせる身は五萬十萬の金の出來ること疑ひなし、唯蓮と申すことの候て、國に長者とも呼ばるゝ事の、一代にて成りがたし、二代三代も續いて善人の生れ出るなり、それを祈り候には、陰德善事をなさんより、全く別義候はず、滅後子孫の奢りを防がんがため、愚老が所存書きしるし畢んぬ。

茶道に就て讀んだる利久翁の一枚起請文

唐土我が朝にもろ〳〵の智者達の申さるゝ觀念の茶の湯の義にもあらず、又學問して念の心をさとりて呑む茶の湯にもあらず、只喉の渴きをやめん爲には、湯だに湧きぬれば必らずやむぞと思ひしりてのむ外に別に仔細は候はず、但し數奇と云ふ事は我が胸さへ奇麗に候へば、よろず其内に籠り候なり、此外に興すべきことを存せば、人の憐れには

づれ數奇者とはいはれまじ、此道を信ぜん人は、たとへ和漢の學を得たりと云とも、一文不知の愚の身となりて、尼入道の無智の輩に同じくして、數奇の振舞をせず、只だ只だ一向に湯をわかすべし。

歌道に就て小澤蘆菴の一枚起請文

唐土我朝に、もろ〳〵の智者達の沙汰申さるゝ三史五經の廣き旨を明らむるにもあらず又志賀の園、鷲の峰の深き御法を悟りにもあらず、歌はたゞ思ふことをすなはなる詞に聯ねて、疑なくはゆるやうに讀むことぞと思取りて、修行する外には別の仔細も候はず但し六義九品など申す事候は、皆な決定して能く聞わぬれば、其内に備はり候也、此外に奥深き事を存ぜば、三神のあはれびにはづれ、長く詞の道に迷ひ候べし、譬ひ一代和漢の書をよく〳〵學ぶとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同ふして、智者の振舞もせずして、唯一向に讀習すべし、あなかしこ。

第三十四、偉人の消息

蕃山先生の略歴……先生の知行合一……先生の治政……先生の歌道

熊澤蕃山と云ふ方は、實に感心な人である蕃山先生名を伯繼と云ひ、通稱次郎八又後に助右衛門と改め、別に了介と號した、元和五年を以て京都に生れ、姓は野尻氏であつたが後に外祖に養はれて熊澤の姓を冒された、廿二歳の時始めて四書集註を讀み、道の大切なることを知り、廿四歳のとき中江藤樹に就き、孝經大學中庸等を學び、幾くもなくして桐原に歸り、貧に處して獨學すること五年、正保二年に至て再び池田光政に仕へ、三千石を給せられて國政に任じたのです、正應二年備前に大洪水のあつたとき、自ら江戸に至つて幕府に乞ひ、黄金四萬兩を借りて窮民を賑はし、明暦元年の飢饉にも邑里を巡視して一に濟生を圖り、大に一國の民に德とせられましたが、明暦二年病を得て職を

養子に讓り、明年京師に歸られた、時に年三十二、貞享四年古河に移り、其十月封事を幕府に奉つて政治の得失を論じ、大に將軍綱吉公の旨に反して禁錮せらる、後專ら心を風月に移して元祿四年八月十七日七十三歳を以て古河に歿された。

蕃山先生は常に實學を尊んで知行合一の學說を重じ、嘗て謂ふ、『學は人倫を明かにする所以で儒者の私業でない』、又『君子の學は當に文武を兼ねて資し、之れを事業に施して天職に位すべきである、我は一介の武夫となるも儒者流となるを願はぬ』。

力を治國經世に盡し、其の根底の精神を陽明學に取つて廣く朱子學をも參考したのであります、故に己れが學風を人に答ふる一節に朱子にも採らず陽明にも取らず、たゞ古の聖人に取つて用ひ侍られたのです。

蕃山先生年二十七歳にして、備前の國主池田光政に仕へて祿三千石を給はつたが、國中大に治まりました、或時光政が『我が政事の善きに非らず、唯隣國に比して稍々長ずる

を見るのみと』云はれたを聞て先生は、『是れ非なり、隣國の政は甚だ能くない今其差之に長ずと云ふも五十歩を以て百歩を笑ふのみ』と、光政聞いて感悟し、益々勵精して非を改めたと云ふ事です。

人あり嘗て先生に向て『先生嘗て諸侯の臣となる、今列國の君或は儒を以て先生を召し祿を授けて之を臣とせば如何』と云ふと先生答へて、『若し我列國に遊事して其口を糊する者であつたなら之れが臣となるも亦可ならん、されど予は既に致仕したから復人の臣とはならぬ、苟も吾と心を同ふするものにあらずば、妄に大名の養ひを受けぬ、譬ひ將軍の御召しあるとも出て從はぬ』と云はれた、又或る人が『先生此頃は間がありしや』と云ふ問ひに對して、『我善をなすに日も亦足らず、何の間かこれあらん』と答へられた、先生固より國典に通じて和歌を讀み大に見るべきものがありました。

寛文七末年事情の爲め吉野の山深く住みて

此春は吉野の山のやま人と、なりてこそみれ花の色香を

寛文申年閑居したるとき

つたへ來て春は神代に變らぬを、人の心ぞむかしにぞ似ぬ

貞享四年冬罪を得て禁錮せられ、翌年春歸雁を見て

老の身の見んことかたき故里に、春待ち得てや歸る雁がね

ゆく雁に關はなくとも、いましめあれば文もつたゐじ

第三十五、朋友相信

友情信義……一茶の情文……金蘭の同心……莫逆の友

忘年の友……刎頸の友……麗澤の友

友達のよしみといふは、尤も大事なることで友誼といふのであります、これ互に信義を

守り親睦を旨として相交る道をいふのであります中にも心友として、心より互に相許せる間柄や、或は親友として日常親しく交際せる間柄にあつては、常に樂を分ち憂ひをも共にするのであつて、世にこれほど頼母しきものはありませぬ、勿論單に友人として交る間柄の人もあるが、何れに對しても必ず信義を守らねばなりませぬ、勅語にも『朋友相信じ』と垂示あらせられたのが此の心得であります。

世に舊い友達程なつかしきはなし、論語にも『友あり遠方より來るまた樂しからずや』と云ふてあります。

俳人の一茶が、或時御寺へ行つて本堂の柱を見た所が、長崎の誰れ人が八月廿八日詣るど云ふ樂書がしてあつたのです、所が其誰人なるは一茶の舊友であつて、一茶が嘗て長崎で遊んだ時に、共に一つ鍋のものを喰ひ合ふた交情であつたのです、それで一茶は歎息して若し自分の此所へ來るのが今一日早やかつたならば、舊友に逢ふて舊時を談じ、

友情を温ためる事も出來たであらふに、其人は既に去つて跡なく、長崎と云へば四百里をもへだつる遠方、殊に互に年を重ねて居れば再び現世で出會ふ事も、むつかしからう惜い事をしたと、友を慕ふ情に迫て詠んだ句が、

近づきの樂書見ねて秋のくれ（俳人一茶）

でありました、實に人は斯く友誼を重んぜねばなりませぬ。

故事を少し談して見よふならば、

金蘭の交、彼と我心を同ふするを金蘭と申します、金は堅き物にして同心の友情は金の堅きが如く、又蘭は香草にして同心の言は蘭の馨に味ある如き謂であります、易に曰く『二人心を同うすれば其利金を斷ち、同心の言は其臭蘭の如し』とあるに依ります。

莫逆の友　莊子太宗師に云ふ、心に逆ふことなく、遂に相與に友たりと此心自から悟りて相契り相順ふの謂であります。

忘年の友　老幼相友とするを忘年といひます、禰衡といへる人、秀逸なる才あり、少年の時孔融といふ學者と交りましたが、時に衡は未だ二十才に滿たなかつたが、融は既に五十歳でありました、されど忘年の交をなしたのです。

刎頸の友　これは生死を齊うせんと欲して頸を刎ねても悔るなしといふ謂で、史記といふ書物に趙の惠文王について出てあります。

麗澤の友　朋友相資くるを麗澤といふは、澤水の鐘る所の者は雨で雨の爲に澤は麗に附く、故に彼此交々潤ふの謂であります。

交友に付て未だ二三あれど略して、暫く其金言を談して見よう。

古人交を結ぶ唯心を結ぶ、今人交を結ぶ唯面を結ぶ。（明心寶鑑）

獨學にして友なければ則ち孤陋にして聞寡し。（禮記）

麗澤兌、君子以て朋友と講習す。（周易）

君子は文を以て友を會し、友を以て仁を輔く。（論語）

一死一生乃ち交情を知り、一貧一富乃ち交態を知り、一貴一賤交情乃ち見はる。（史記）

人生より交誼を除けば恰も世界より太陽を除きたるが如し、友誼より善良愉快なる者は吾人天命より受けたる中に一物もなし。（シセロ）

第三十六、落葉片々

青砥藤綱……赤染衛門……明智光春……淺野幸長……甘糟太郎

青砥藤綱の剛直には實に感心であります、或時北條時頼が、鶴が岡八幡宮に參詣しける夜の夢に『汝國家を治めんと思はゞ青砥藤綱を用ゆべし』と示し給ふと見て深く其示現を喜び、翌日藤綱を召して知行を增し與へましたが、藤綱怪みて其故を問ふ、時頼は之れ神の告にて行ふ所なり、藤綱辭して曰く、『夢に依て臣を用ゐ給はゞ他日亦夢に依て

臣を斬り給ふことあるべし、それ何の功勞もなきに厚き賞を受くるは國賊なり、藤綱寸功なし、此事あるべからず』と、時賴其言を賢なりとして、左衛門尉を授けたりといふも道理であります。

赤染衛門の所へ、或人が親切に櫻の花の大なる枝を折りて贈りたれば、赤染は反て無情なことかなとて歌をもて送りました。

我が爲めに折れる心はうれしくて花惜まずと見ゆる枝かな

これは櫻花を惜氣なく澤山に下されたは、過分千萬なれど、かやうに大枝を折たは如何にしても花を愛する心のなきしるし、無風雅のところが殘念であると云ふ意です。

明智光春は、主人光秀の謀叛にて信長を弑せし時、安土の城を守りしが、山崎の合戰心もとなしとて、安土を立ちて京都へ來るに光秀既に討たれたりと聞へければ、阪本の城に入らんと、粟津を北へ大津を指して行くに、秀吉の先陣に行違ひ、止を得ず湖水に馬

を入れたるは、明智左馬之助湖水渡りとて千古の美談であります。

淺野幸長は病氣にかゝり、日々不愉快な生活を送つて居たとき、藤原惶窩と云ふ儒者が來て、幸に修養して孟子の講釋を聞くことになりました。

孟子の告子章の一節で

天の將に大任を此人に降さんとするや、必ず先づ其心志を苦め、其筋骨を勞し、其體膚を饑やし、其身を空乏にす。

と云ふ所より讀み初めると、幸長は身動きもせず一心に傾聽して居ましたが末端の入ては則ち法家拂士無く出ては則ち敵國外患なきものは國常に亡ぶ、然る後、憂患に生きて安樂に死することを知る。

幸長は非常に感服して、以來何事にも謹直に勤め、萬事を勵んで人に非難を入れられぬやうにしましたが、從て身体も健康になりて、常に『聖賢の敎へはかほどまでに親切

なものであるか』と喜ばれました。

甘糟太郎忠綱と云ふ人は、法然上人（浄土宗の祖師）に遭ひて念佛の行者となりて、常に念佛を稱へたりしが上人に尋ねて曰く『我れ武勇の家に生れて弓箭の道にたづさはる、敵を防ぎ身を捨てゝ惡心熾盛にして願念發起し難し、反りて敵の爲めに後れをとり臆病や出づるならん、故に家業もすてず往生の素懷を遂ぐべきやと』上人答へて『彌陀の本願は機の善惡を問はず、行の多少を論せず、身の淨不淨を擇ばず、時處諸緣を嫌はざれば、死の緣によるべからず、罪人は罪人ながら名號をとなへて往生す、これ本願の不思議なり、弓箭の家に生れたる人、たとひ軍陣に戰ひ命を失ふとも、念佛せば願に乘じ來迎に預らんことゆめ〳〵欺べからず』と授られたら、忠綱は往生は一定と喜びましたそうです。

第三十七、消夏法眞意

暑き日や心すませば風の吹く

芭蕉翁の口吟……青年古墳……露の世の中……親の子を思ふ愛情

とは桂丸の口吟であります、いかに暑いからとて心を靜にして端座せば覓めずとても自然に風は吹き來りて、涼氣を感ずるのであります、されば心の靜養が大切です、所が人は暑さ來れば寒さはなきものゝ如く思ふも、光陰は矢の如く、直ちに變化の時候と移ります。

頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲

これ芭蕉翁の聲であります、勢ひ盛んのあの聲聞くときあれが土用だけであるとは思はれませぬ、人も旺盛なる勢を持ち傍若無人の振舞も遂には、是れ古墳の塚と變るのであります。

破る子のなくて障子の寒さかな

若い者は、長活き老いたるは早しと云ふもいづれの青山か墳墓にあらざるはないです、古墳多くは是れ青年の塚とありますが、蝶と愛し花と育てた、可愛我が兒も今年も何處へ行きたやら、モー歸らぬ永い旅に赴いたのであるかと破れ障子を眺めたら、障子に戯れの穴があいてあるから、去年はたわむれた所作後の穴より細き風が吹き入る、一入秋風身にしみて、我身に限りなき無上の感じを起したとは、加賀の千代が泣いたのであります。

露の世は露の世ながら去ながら

とは一茶の歌ふ所であります、人生ホンニこんなものであります。

しかし人は働くべく活きて居るのであります、露の身じやから活働するのであります、然らざれば生れ來る甲斐はないのであります。

根は八百屋花は花屋で葉は味噌屋

蓮根は八百屋が受け取り、花は花屋が買ひ取りて、葉は味噌屋で用に立てるとのこと人はいづれも働きよふによりて用にたつのであります、其用を忘れてはなりませぬ。働くのみならぬ人は、情感がなくてはなりませぬ、情感の勢力亦偉大なるべしであります。

京都白川の邊に、二人の男兒を育てゝ居寡婦がありました、二人とも僧侶にせんとて兄を叡山に預け、弟を愛宕に上らせて、佛道修行をさせましたが、光陰は矢の如く七年の星霜を經たれど、兩人とも一度も歸省せないから一度あいたいものと母はこがれて居りましたが七年目の五月に叡山に居る兄が歸りて來ました、母は踊り上りて喜び明日は弟も來ると云ふ傳言がありましたから、久しぶりに一家三人が樂しく話せると云ふて、喜びました、すると兄の云ふには『私は明日雨天ならば逗留が出來ますれど晴天であれば必ず歸山せよと師匠の仰せでありました』と云ふ、母の思ふに雨天ならば兄は逗留すれ

ども、弟は愛宕から來ぬであらう、晴天ならば弟は來れど兄は逗留することが出來ぬ、ア、困りたものぢやと、種々考へた末、左の歌を詠みました。

行くをとめ來るを待つ間の夕時雨出入の雨もわけてふれかし

一心に祈りたれば、此母の誠の心や通じけん、計らずも叡山の方は大雨にて、愛宕の方は晴天でありたとあります、兄のためには降れと云ひ、弟の爲にほ照れと祈る、降れと云ふも照れと云ふも親の誠に違ひはありませぬ、此の情感の誠には天も感動せられて意の如くなるのであります、人はたゞ働くものとて、義理も忘れ人情も捨てゝも我利を計らんとするもあります、義理と人情捨てたればホンノ人間は器械の如く唯だ働くのみで何の價値もなきものであります。

第三十八、慶哉得遇

慶哉難逢今得遇　永證無爲法性身

善導大師の釋文……法然上人の消息……他力本願の眞意……鸞心僧都の御文

慶ばしきかな、逢ひ難くして今遇ふことを得たり、永く無爲法性の身を證す』

とは是れ淨土宗祖法然上人の御師匠の善導大師の御文であります、そうたい人は、見當違ひが多くして、苦なるも樂と思ひ、常になきものを有るものと思ふものです。

情けない事には、一寸先きは暗であります、多年經驗せる事業に從事するも、行き當つて始めて氣が付くのであります、然し何は捨て於ても人死して靈魂の行衛は何處であると、靜かに考へ、嚴かに思ふて見れば、鬱々として樂しむことはできない、今一たび阿彌陀といふ御佛に接し、あなたの慈悲深き本願の救ひに逢ひたる其時、人生の苦み、障り穢れの中に耽溺せるも、常に快樂と喜びに日を送り、又來世靈魂の行衛も安心なることと、慶ひかな、彌陀の本願に逢ふ事を、實に喜のであります、それを宗祖法然上人

の消息に

受け難き人身を受けて、遭ひ難き本願に遭ひ、起し難き道心を起して、離れ難き輪廻の里を離れて、生れ難き淨土に往生せんこと悅の中の悅なり。

一たび聞て一たび味合へば、深々と其妙味が湧くのであります、思へば誠に喜ばしき御教であるのです、此逢ひ難きを空しく暮し、空しく過ぎなば、いかに悔ゆるとも其詮なし、されば、此度逢たを幸ひとして、慶びの中から佛名を稱ふれば、稱ふる聲に應じて慈悲の親たる、彌陀佛は形の蔭に添ふ如く附きつ纏ひつ、我等を擁護して離れ玉はぬのであります、故に善導大師は

彌陀の身心は法界に徧ふし衆生心想の中に影現す。

この語は誠に貴き思召であります、又宗祖法然上人も、此法語を翫味されて、詠まれたるに

唱ふれば、こゝに居ながら極樂の、聖衆の數に入るぞうれしき、

たとひ人生の格に、或は悲し、怒り、歎き苦み、悶へたる心にも常に淨土に遊びて、無爲の樂みを得るのであります、無爲とは淸淨なる所を、無垢なる行爲を云ふのであります、永く自由法性の身を得るのであります、こゝを慧心僧都の御言をして味はへば、

然るに彌陀の淨土は快樂不退の所にて、六通三明さとりて心の如く自在なり。

第三十九、念佛の威力

德本上人略傳……言葉の末……教訓の金詠……原因結果……教育の偉力

德本といふ上人は、紀州におん生れなされ非常なる大德にて、いかなる人も上人に一度接せば歸服せぬものはないと迄の德者でありました、上人は幼少に一度も學事に就たことはないといふに、成人には大抵の書籍を通覽せられ又書も克く認め玉ひ、とりわけ御名

號の六字は立派なもので德本流と迄世にもてはやされ諸人歸依の限りないのです、上人は阿彌陀佛の化身なりといふ位にて、寒中水行をなしては念佛を唱へ、氷の中、雪の裡なんのその一生火もの絶ちなれば、養たものは少しも召し上らぬ、其苦行難行は實に古今珍らしき念佛の行者であります、死する二三年前には身から光明を放ちて時ならぬ阿彌陀如來の身を現じたると、言葉の末といふ本にかき殘されてあります、其のお書き遺こしの一二の御歌を伺へば

怠らぬ夏のかせぎのほど〳〵も、穗にあらはれて出づる秋の田

暑いからとて怠惰て居ては、秋の季節に稻穗の收獲を得られぬ如く、人として大切なる此一生に御念佛を唱へずは、人間の一生の終るとき、我が靈魂は何所に歸着するならんと狼狽へても其の詮すべはありませぬ、されば常に念佛を喜び唱名相續をなせば、生て居る中は佛の護念を蒙り、死なば佛の本願に引立てられて目出度迷ひの境界を打ち止め

て悟りの御淨土に生れるとは悅はしき、

德は本財は末とて陰德を、つめば陽報ありとこそ知れ

原因結果の理法は寸分間違いはありませぬ、鏡に對て我が容貌を映すが如く、蒔た種なら芽ずばならぬ、されば財なり福の本となるの德であります、其德は即ち陰德であります、陰德は人の知ない隱た善き事を爲す、されば其德は自然に現れて、我身の幸福を得ることになります。

心には綾錦をもきせよかし、身にはつゞらのころもきるとも

人は虛榮とて表を飾りて內裡を飾らぬ、身は纖褸を纏ふとも、心の修養ある人を望み貴ふのであります、いづれも同じ心の中は猿智惠であると歎げかれたのであります。

若くとも良藥ならば親達が、こらへて飲んで子にも呑せよ

親として子供の敎育程大事なものはありませぬ、或る敎訓となる事實談があります、そ

れは窃盗犯で入監した囚人が咄したのに、私が幼少の頃御寺へ遊びに行いて、歸りに草履が見へなんだゆへ跣足で歸りましたら、母は大層怒りまして、人に草履を盗まれてお〆〳〵跣足でかへる馬鹿があるかと申しました、此時私の小供心に、なるほど人に草履を盗まれた時には、代りでも履て來ねばならぬと確く思ひました、それから後に下駄を失ふたことがありました、今度は母に叱かられまいと思ふて、外の下駄をはいて歸りますと母はそれを見て、何だ馬鹿、こんな穢い下駄と替へてくる馬鹿があるかと叱りました、此時私はこれからは必ず美き下駄と替ることにせよと心に嚴く思ひまして、其後穢ない下駄をはいて行きて、思ひ切て立派な下駄と替て母に一度は賞めて貰ひたいと、はき替への下駄を母に見せたれば、ソウダこれでよいのであるといはれた、それから後は人が珍らしきもの美き物を持ち居ればすぐにほしくなり、知らず〳〵の内にこんな身のうへになりましたと、涙をこぼして語る所これ全く親の罪であると申せます。

第四十、人生の意義

婆婆と云ふもの……苦勞の價値……信仰の眞意……明治天皇の御製

既に日本は二十年前支那と戰ひ、十年前には露國と戰ひ、今亦歐洲大戰爭の交戰國の一となつてゐます、此調子では、將來十年二十年の後に、復た孰れの國を敵として戰はねばならぬかも知れません。

是が人生である、婆婆である、恁く度々の戰爭せねばならぬといふも、定めし深い意味のあることに相違ありませぬ、何となれば、餘りに世が泰平無事であると、誰の心も安逸に慣れ慣れて、たゞ氣樂に陽氣な生活をせようとして、難儀苦勞も知らぬことになつてしまう、何うです、日露戰後の日本の狀態は、たゞ國民が奢侈や贅澤にのみ馳りて風俗も壞れ、道義も地に墜ちやうとしたではありませんか、殊に青年學生なぞが、頽廢的

の氣分に溺れて、更に難儀にも苦勞にも耐にられぬやうになつてしまい、婦人までも勝手氣儘な擧動をしたり、榮耀贅澤の有りだけをして、戊申の御詔書も反古になつてしまうといふ有樣、是では國家の前途も危ぶまれる次第であります、故に天は更に大難を日本國民の頭上に下して、私共を試練して下されるのであります、難儀せよ、鳥は必ず風に逆ひ、魚は必ず流に溯る、鳥でも魚でも風に順ひ流に下るのは樂ではあるけれど、翼や鱗が緩んでしまう、苦勞は苦勞でも身の爲めになればこそ、風に逆ひて飛び流に溯つて游ぐのが鳥や魚の修業であるのです、日本國民もこれから愈々困難を累ね苦勞を積んでこそ、末永く帝國の大發展を期することが出來るのであります。

それで怖ろしき戰爭がないと、人の心も睡つてしまうて、佛法の尊とさも忘れ、信仰の大切なことも感せずにゐる、無常の彈丸はヒユー〳〵と迅速に何處にも飛んで來てゐれど、それを何とも思はずに、立派な家とか、美しい衣服とか、財産や名譽の事のみが胸

一杯になつて、大悲本願の尊さも思はず、南無阿彌陀佛の六字も口に浮ばぬことになつてしまう、何人もたゞ此世の樂しさに浮かれてしまうて、後生とも未來とも思はず、極樂と聽いても、更に懷かしうも思へぬことになつてしまう、それが此樣に悲慘な戰爭といふものであつて、血の海を湛へ、屍の山を築かねばならぬとなつてみれば、そこに火宅無常の世界といふことも知られ、厭な娑婆であることも思ひ知られて自ら本願の手强さもたのまれ、念佛にも强い力が味あはるゝではありませんか。

誰でも心底に死の覺悟がなうては、戰爭は出來るものではありません、無常迅速の世の中、お互に明日も知られぬ露の生命ではありませんか、憂いも辛いも暫時のことであります、飽迄大君のため、皇國の爲め、難儀もせやう、苦勞も致しませう、たゞ南無阿彌陀佛の六字さへあれば何時ごこで、死んだとて安心であります、今死ねば直に淨土へ生れる身となつてゐてこそ、いかな艱難辛苦も凌がれ、御國の爲めに生命がけで働くこと

も出來るのであります。

とる棹の心長くも漕きよせむ、蘆間の小舟さはりありとも

とは、明治天皇が遼東還附の折に詠ませられた御製と傳へられますが、恰も蘆間を漕ぎ遣る小舟のやうです、幾多の障はあることなれど、それは棹を執る船頭は勿論、其に乘り込む國民も充分心長く忍耐せねばなりませぬ、また同心戮力して進み行かねばなりませぬ。

第四十一、意思強硬

信仰確立……鐵眼禪師の素志……公慶和尚の強硬

雨森芳洲翁の精力……法然上人の信念

何にをするのも、意思が強硬でなければ成功せぬのであります、その意思の強硬なるは

尤も信仰心が強けねばなりませぬ、信仰心はいかなる事業に當ても奮鬪するには偉大なる力らが現はれるもので、こゝに至て難遂の事業も成功するのであります。

彼の鐵眼禪師は一度其志望を立てゝ、十八年間苦辛をせられた、其志望は釋尊一代の經說の版下を拵へ世間に流布したき考へであつたのです、所が最初諸國に自から遊行して版下を拵へるだけの資金を募た所が、大阪邊に大飢饉があつて人民が困て居るので其金を惜氣もなく惠んで了つたのです、夫から又苦心慘憺の結果、漸と出來上たと思ふ頃又々飢饉年があつて、折角の金も之に寄附して了ひ、三度目の寄附金で出來たのが現在の黄檗山所藏の大藏經で在と云のであります。

それから又其頃南都奈良の東大寺を再建をなした公慶和尚といふ人がありましたが、今の大佛の本堂を再建した人で、近頃政府の力で大修繕を成されたので、元來大佛は以前源平の時代に法然上人の弟子俊乘坊重眼といふ人が諸國に寄附を募て再建なされたもの

であります、其後永祿年代に、松永彈正の爲に、兵火に焚れて御堂は跡方もなく、本尊は未だに雨曝になつて居られるといふ有樣でありますから何かして再建したいものであるとてそれより千辛萬苦の勞をなし遂に成功をなして、今日の進んだ美術工藝の專門家の智識を以てしても、容易に其修繕の設計さへ立兼る程精緻な建造物を拵へられたのです苦心と、中途の障碍を排された努力は何の位であつたらう、實に想像意外であります此意思强固なる事百練鐵の如き決行をなされたのであるのです。

近代の文學者たる、雨森芳洲翁が歌を習ひ始めたのは八十一の年であつたといひます、其始めて志を發したのは、或日買物なさんとて或る店へ寄つた所が、其處で五六人の人が集まつて、歌の話しをしてゐたのが甚面白かつた、ツイ和歌を作つてみたいといふ志を發した、そこで作歌の準備として古人の名歌を千首暗誦して見たいと、古今集を千首遂々暗誦して、お互が年が寄ると記憶が惡くなるので、殊に八十一の爺さんが一

千首の歌を暗で覺ゆるといふことは却々容易なことではありません、それから又同じ歌を作るなら一萬集作つて見たいといふので遂に寶曆五年に死ぬるまで一萬首作つたといふ事です、何んと其精力は大いしたものでありませぬか。

其精力はすべて意志の力であります、其力らは統て信仰より湧き出づるのであります、かゝる九十近い老人が大きな事が出來るのは信仰力の强いからであります。

淨土御他力を御開らきなされた、法然上人は生涯に釋尊一代の藏經を五返まで繙どかれたといふ、これも半生期にて廿三の御歳であつたといふ、其歳より專修一行の念佛の行者となられたのであります、其念佛の弘通に就き貴賤誰かれなしに信ずる勢ひは、實に朝日の東天に昇る勢ひであつたから、諸宗の無智の僧侶は法然上人をねたみそねんで念佛停止の制札まで時の帝位に奏して建てたので、遂に七十五歳のとき讃岐の國まで流刑をお蒙りなされたれど、『念佛は愚老一期の勸化なりたとひ死刑に遇ふとも、此念佛を

唱へずば止まんの御決心』、今日百萬の念佛の信者を見るに至つたのであります。

第四十二、歳暮の斷片

準備……大間違……堪忍……守口……自餘……酒飲……忠恕

注意　うか〳〵と知らぬ間に、なにをなしたやら別に變た目新らしきこともせず、ぼんやりキヨロリカンとして、今は歳の暮となりて、あれもせねばならぬ、これもなさねばならぬと、狼狽だす。

それ見たか常が大事じや大晦日

準備　夏にならぬ先に單物の用意、冬が來ぬ先に綿入れの準備、火事の用意に忍を建て雨の降らぬに傘の用意とは、テモ能う行屆た此世の萬事、乍去今をも知れぬ無常の命、後生の準備は出來たりや否や。

曇る空目には見ながらかさ持たで、山路にかゝり雨にぬれけり

大間違　闇夜に歩く拍子に、親爺の頭を蹴り、エ、邪魔になると怒き〳〵、一足歩て德利を蹴り、ヤレ勿体ないと押戴たと云ふ話がある、世間にはこんな人が多い今日、偖困つた大間違。

いたはりて親の育てし甲斐もなく、身をあだになす人ぞはかなき

堪忍　忍の德たる持戒苦行も及ぶ事能はざる所、ならぬ堪忍するが堪忍、なる堪忍をせぬが疳癪、胯をくゞるの恥を忍で天下を胯にかけた韓信な話を聞き乍ら、親の意見に疳癪酒、つまり身の損心の毒、早く心の醉を醒し、『蹈まれても咲くたんぽゝの笑顔かな』と、堪忍するが何より肝心。

堪忍はかならず人の爲ならず、つまる所はおのが身のため

守口　病は口より入り、禍は口より出づ、お炊はお神さんの事を隣り近所で饒舌た罰で

暇が出た、丁稚は旦那の事を得意先で惡く言て追ひ出され、生意氣書生や女學生が尻に合はぬ屁理屈を並べ、何にも知ぬ百姓に意見されたとは、あまり感心仕らぬ、矢鱈無生に役にも立ぬ誹り話、人の非ばかり擧て無益の言語を吐と遠見ゆる其人の腹中。

知らぬ事知つた顔していはしやるな、口を開くとはらわたがみゆ

自僻　諺に云ふ人に七僻ありと、貴人名將にも猶一癖あり、義經の空見義仲の卑野或は歌を詠し詩を吟ずる癖あり、酒飲家に瞋る癖、泣く癖、笑ふ癖あり、話をするに顏を撫で、頭を搔き、鼻糞を擱る癖あり、癖久しうして性となる、自ら非と知ば改べし、他力の信者はお念佛を唱る癖を付べし。

慣れぬれば徒ら業も捨て難し、只念佛の癖をつくべし

酒飲　一盃は人酒を飲み、二盃は酒酒を呑み、三盃は酒人を呑む、酒は百藥の長ともなり、亦百毒の長ともなれども、世人毒となして藥となさず、醉て美人の膝を枕とすれど

も、醒て堂々天下の權を握らず、況や醉はざれども、本心を忘失して猶ほ醉へるが如きをや、故に前漢書に魏候笑て曰く、醒而狂、何必酒ノミナランヤ也と、愼ざるべけんや。

ひが事も難も酒より起るぞとよく心得て樹酌をせよ

忠恕　醍醐帝や天智帝が、寒夜に御衣を脱せ給ひし古今の美談『我子なら隷には伴れじ夜の雪』子を憐む心を以て、下稚下僕に及ぼせば一家の和合。

こゝろせよ使ふも人の思ひ子ぞ、我思ひ子におもひくらべて

第四十三、新年の福壽

松竹梅の節操……亘忠上人の詠歌……五濁の眞相……光明攝取……極樂無爲

籔の竹も切りて門に立れば節のかざり　山の松も析りて軒に立れば操のしるし

野の梅も挿して床に立れば家のかをり

私の如き淨土詣りを喜ぶ眼から眺めて見れば、めでたきも又一入のめでたさであります御佛の慈悲に誘はれたら、無量の壽命の得させて頂き、福德も限りなき身の上とは、喜ばしきこと限りなしです。

彼の淨土宗御他力の教を、お布きくだされし第三代記主良忠上人は、實に大德にまし大學者でいませしが、御年僅か十四才のとき正月の元日に詠まれしに、

五濁の浮世に生れしは　うらみかた〳〵多けれど
念佛の往生きくときは　かへりて嬉くなりにけり

實に五濁の浮世は轉たゝなさけなきなり、界内戰亂にして修羅の巷となり、風起りて人蓄を損じ、火災起こりて人を泣かしめ、地變天災交々ありつゝ之れ却濁、正しき道には入らず邪しまに、見込み違ひをなして一生を過ち、人死たれば又も人に生ると、人は何返でも人に生ると、人死にたれば煙の火の消へたるが如く、何處ともなく消へ失ぬと、

見濁を起し、慾の道には飽迄强盛にして、慈悲もなければ善根もなく、唯自已の利益を計らんと晝夜朝暮しばしも忘るゝ暇なくして煩惱濁を隆んにす、而して德義や人情は紙より薄くして、忠孝の美德も心得ず、互に生存競爭に閑なく、道德は地を拂ひて平和を缺く之れ生衆濁なり、昔しはさして衛生を重んぜなんだにも拘はらず五十年を人の定命と定めつるに、今は衛生も注意は行き屆き、保養上にも最も進んで居るにも拘はらず、人の壽命は平均三十四才が定命であるといふ、之れを命濁といふ、この濁惡の浮世に生れしは、うらみかたく多けれど、他力の本願に遭ひたるは誠に喜ばしい、すれば平生供る餅も正月と思へば御鏡捧るも嬉れし、毎日飲れる水も初汲と思へば御供養をも喜ばしいのであります。

佛の心も寫りて我に宿れば玉のかざり　法の雨も降りて人に懸れば悟りとしる
僧の道も守りて世に立れば救ひの光り

すれば阿彌陀如來の光明に攝取てます、如來の光明に攝護せられんと思ふ者は、必ず彌陀如來の名號を稱へて、永劫の快樂の内に入らんければならぬのです、御互に御念佛を相續して、お淨土に生れたれば、苦は毒だにもなく唯樂みのみを受くのであります、併し此の世の勤めは暫時にして、此意を御經には『一世の勤苦は須臾の間なりと雖も後には無量壽佛の國に生れて快樂究り無し』と申してあります、善導大師は『樂みを受くること常に間なし』と仰せられ、元祖大師は『淨土に往生せんこと喜びの中の悅びなり』と御示し下され、阿彌陀經には『但だ樂みのみを受く故に極樂と名く』と說てあります

第四十四、修養の偉人傳

西行法師の俗姓……法師の道心……法師の最後……法師の逸事

修養として偉人傳を伺ふも大に力あることであらう、彼の西行法師は有名な方である在

俗の名を佐藤義清と云ひ、殊に弓射を能くし頗る六韜三略の兵法に通し、鳥羽天皇に仕へて從五位左兵衛尉となる、性和歌を好んで其巧妙殆んど鬼神を泣かしむ、故に君寵ことに深く、花下の遊び、月前の詠めなどの御會には必ず召されて居た、されど世擧つて名利に奔りておるものであるから暮りに人生の淺ましきを思ひ夙に遯世の志があつた、或る時同列の友佐藤義廉と云ふ人、年未だ壯ならずして死なれた、其妻其母之れを悲しんで止まず、義清も一方ならず悲しみて一首を詠みて

年月をいかで我身のおくりけん、昨日の人も今日はなき世に

これより義清は直に出家せんと欲せしも、故ありて果さず、其年し秋につい佛門に入らんと決し、佛前に向ふて三拜し、一間を立出たるに、四歳の愛孃父を見て喜びに堪へず其袂にすがるを見、義清も恩愛の念に迷ふて一時心を亂だせしが、忽ち悟り、情けなくも愛孃を椽の下に蹴落した、義清の妻は其の夫に恥かしからぬ女丈夫にて、かねてより

夫に出家の志あることを察しておられるから、その娘の泣き悲しむも、左程に驚かれなんだ義清之れを見て。

露の玉きゆれば又もあるものを、たのみもなきは我身なりけり

直に西山の勝持寺に入りて髪を削り、法名を圓位と呼び、後に西行と改む、時に年二十五才、それより一羽の僧衣一枝の杖により、瓢然として天下を周遊し、月を觀、花に會ふ毎に和歌を以て感をのべ、復世上の何物たるを知ざらるが如くでありました。

文治の末より東山雙林寺に庵を結び此の處に死期を待たんと定めた、常に釋尊入滅の日に終りを取らんことを願ひて、

願くは花のもとにて春死なん、そのきさらぎの望月の頃

と詠せしが、果して建久九年二月十六日、此の庵室にて終りました、辭世に、

佛には櫻の花をたてまつれ、我が後の世を人とならはゞ

法師或る時江口の里へ行かれしに、俄かに雨がふりて來て、蓑笠の用意はなし、致し方がなゐものですから、賤が軒端に立寄りて雨宿りしながら、内をのぞいて見られたれば四十ばかりの女が手盥をもちて雨のもりを受けてうろ〳〵するを見て、『賤がふせやをふきぞわづらふ』と云はれたれば今の女は耳かたむけ、『月はもれ雨はもるなと思ふにぞ』と上の句をつけたので、

月はもれ雨はもるなと思ふにぞ、賤がふせやをふきぞわづらふ

と一首の歌が出來たのです、夫から西行は内へ入り後生の物語などせられたのですが、この歌の心は、屋根から月のさしこむは不破の關屋のこゝちして居ながら、月を見るが面白さに、其穴をふさがずにおいたら其穴から雨がもりて難儀をする、月はもれ雨はもるなと思ふゆへ、心つかいはあれども雨のもる穴からでなければ月はもらぬ、雨のもる穴は月のもる穴であると云ふこゝろでありますゝ、我等も苦痛や煩悶のある拙き心の裡に

彌陀大悲の月がもるのであります、罪惡の身はなさけない、されど明漏る慈悲はうれしいのであります。

第四十五、人格の高崇

文覺と西行……文覺の感服……法師の妙歌

前章は西行法師の逸話を出したから、繼いて譚して見たいと思ひます。

彼の文覺と西行法師と、出遇ふた時に文覺上人は豪膽なるきかぬ氣の男であるから、いつか西行といふは歌を詠んで風流を氣取つて居る僞道心ものに出逢ふたら、頭を叩き割らんものと待ちかまへて居るおり、或時西行が高尾に紅葉を見て日を暮し、文覺上人の處を尋ねて一宿を願ひたいと來意を通ずると、取次に出たる文覺の弟子共は大に驚いた今夜は大變である、師匠が豫てから出遇つた時には頭を叩てやると云はれた西行が來た

屹度大騒動が起るに違ひないと心配しながら、其旨を文覺に通ずると座敷へ通せと云はれたので西行を案内して退き、弟子は今に大騒動がおこるであろふと、襖の影にかくれソッと樣子を伺ふておると、案外にも文覺は叮嚀に挨拶して、一見舊知の如く心おきなく、胸襟を披いて快談をするので、弟子は不思議に思ひ、その内に頭を叩くだろふ、今に騒動が起るに違ひないと、拳に汗を握つて心配して居たけれども、其夜は何事もなく無事にすんだ翌日西行法師が辞して歸る時には、文覺は叮嚀に別を告げ、又此地に侍り玉ひしときは心置きなく御訪ねあれよと、懇ろなる言に弟子共は合點がゆかず、早速師匠の文覺に尋ねたるに、『平生から遇つた時には頭を叩き割ると力味なされたに依つて、非常に心配しました所、案外にも叮嚀に待遇なされたのは如何なる譯合でありますか』と、尋ねたるに、文覺は『イヤ己が頭を叩き割られなかつたのが幸であつた』、と流石の氣荒い文覺上人も西行法師には、一歩を讓られた、之れ全く西行法師の純正無垢の清

淨心が自然と顔に現れて、居たものであるから豪氣な文覺も其人に對して見と知ず〳〵大威德の光明に照れて、感服したものと見る西行法師が諸國行脚せらるゝ時、或在所の百姓の家に泊りて翌朝早々立たれしに、十五六町も行くと百姓共がねじ鉢巻で棒を以て追いかけ、西行を取卷き『其方は昨夜とまりた家の牛を盗んだわるい奴である、早く牛をもどせ、戻せばよし戻さねば打ちこらすぞと』、『それはきつい迷惑ぢや、貴公等の知る通り、杖と笠と風呂敷つゝみ一つの行脚坊主がそんなことをしてよひものかそれは大方人違ひであらう』、と云はれたれば、追手のものども、『いや〳〵昨夜其方がとまりた、今朝牛部屋を見たれば牛はおらぬ外に盗だものはない、其方に極まつて居る』と責める、西行は『これは又迷惑なことぢや己れは全く其樣なことをするものではない西行と云ふて歌を詠んで諸國をあるくものじや、何にも其樣なことをするものではない』と云ひわけせらるゝと百姓共はそれを聞て、『いかさま、それなれば牛を盗まう筈もなし

實に歌道の西行ならば今こゝで十二のゑとを一首に歌によんで牛を盗まぬと云ふ、いひ譯をせられよ』と云ふたゆへ取あへず詠まれました。

午未申酉戌もいをば亥子、丑寅ぬ身に卯きな辰巳は

聞いたる百姓共は、大に感心して、御名僧に對し憂い名を擧げ誠に恐れ入たる次第、此の罪平に御許しくだされと、謝したるに、西行も難題を懸けられたるも、其の疑ひを拭ふて、瓢然と立ち去りたりといふことであります。

第四十六、奇人の奇蹟

西行法師の歌道……法師の慢心……普身應化

修養として前章も西行法師の逸話を出しましたが、まだ少々一二の逸話を出して修養の資に充てゝ見たいと思ひます。

西行法師、歌修行に諸國を巡回せられたとき、或野中にさしかゝり、日は暮れかゝる道は幾筋もある、尋ぬる人はなし、案じ案じ行かるゝと、後ろから一人の老翁が來る七十有餘の老人である、『もし御老人、この道を眞直に行けばどこへまいりますか』と問ふたれど、一言の返答もない、ハ、アこれは聾ぼぢやと思ひ、すぐに一首の歌を讀まれた

空蟬のもぬけのからに事とへば、山路も里も教へざりけり

すると、老翁が『御坊樣それは何と云ふものぢや』と尋ねた『これは三十一文字の歌ぢや我は西行と云ふて日本に名高き歌詠みであるが、先刻其方に道を問ふたれど、少しも返事がないゆへに、これは死人が魂のぬけておるのかと、空蟬のもぬけのからに事問へば、山路も里も教へざりけりと詠んだが、どうじや老人感心か』と云たれば老翁はから〳〵と打笑ひ、『そんなものが歌かそれは小兒の寢言も同樣で歌にはならぬ』と云ふ西行腹を立て、老人貴樣は何を知つて……』と云と『知て居りやこそ添削をしてやるの

ぢや、空蟬のもぬけのからに事問へばと云ふては歌にも何にもならぬ、からにといへば決定魂のぬけがらである、ぬけがらに道を尋ねる譯はない、そこでこゝは歟と云はねばならぬ、歟は疑問の言で、活て居るのか死でおるのか、聾かと疑はねばならぬ處ぢやそれゆへ『もぬけのからか』と云はねばならぬ、又事問へばではいけない、『事問へど』と當らねばならぬ、當て山路も里も教へざりけりと云と歌になる、

空蟬のもぬけのからか事問へど、山路も里も教へざりけり

これを聞て西行は驚き入り、『御老人あなたは何國の人でござる』『おれはこの山の入口におる一人ものゝ老人』、『それでは今晩私をつれて行いて歌の道を聞かせて下さい』とたのんだれば、『聞きたくばござれ』と云ふたそれから連れてゆいて歌の奥義を聞く中に、十二三の童子が來り、大先生只今御迎ひにまいりました、只今から御來臨くだされ、門人そろうて御待ち申す』と云ふたれば老人の云ふやう『今晩は旅の僧をとめたで家を出

られぬ、明朝は早からまいる、しかし歌の題は何といふ題ぢや『ハイ雨を焚くと云ふ題でござります、御來臨が出來ずば御歌を頂きませう』と云ふた、『歌はよんでやる、持て行け』と答へる西行もあきれはて、一言半句もあらばこそ、これは〳〵とあきれるばかりに、時に先生、雨をたくと云ふ題で歌がよめますか』と云ふと『よめるとも〳〵詠んで聞かせてやろう』とて

ぱら〳〵と降は木の葉の時雨にて、雨を今朝たく山賤の庵

西行も深く感じ入り、青いきをついて、『モシ貴方は何と申す御方でござる』と云ふと我こそは『人丸明神なり』と云ふて、かき消す如くきへてしまはれた、これ全く西行法師の憍慢心をくじきに來られたのであります、吾人も少の藝能に達し小才のあるを鼻にかけ人を侮辱する樣の事ありてはなりませぬ尤も謙讓であれば我身に德を備へ人は見上る事になります、實に愼まねばならぬことであります。

第四十七、愼重の態度

南洲の度量……南洲の教訓……南洲の磊落……南洲の人格

何事でも總て愼重に考へぬと失錯することが多いものです事によつては、取返へしのならぬことが多々あります、之れには沈着と度量と忍耐と勇氣がなければなりませぬ、それには近世の大家として知られ居る彼西郷隆盛其の人を模範とするがよろしい、士は鹿兒島藩の人で、通稱吉之助、南洲の雅號があります、明治維新の元勳です、明治六年十月征韓論の起るに及んで、在廷の諸公と議協はず、病と稱して鹿兒島に歸り、私學校を起して子弟を訓へ遂に西南戰爭を起すにいたりました、明治十年九月城山に戰死されたのです。

實に近世の英傑として逸話を殘せるの人亦修養の資とされてゐます、西郷隆盛、弱齡の

頃交友四五と共に兎ある酒樓に上りて痛飲して居らると、座に侍つて居た美姫が、何やら彼やと盃盤の間をとりなして居るのを顧て、若き西郷は何んと思ふたか火鉢の炭火を一つはさんで『オイお前にこれをやろう』と云ふと妓はすかさず晴着の袖にこれを押し戴いたのです、着物で火を受けたからたまらない、可惜晴着に焦穴が出來てしまつたのです、それで何とかして此の復讐をしたいものぢやと云ふよりスグ、其儘逆もどしに、又火をはさんで、今度はこちらから西郷に『御返禮』と云ふて差出すと、西郷は何とするかと思ひの外少しも周章ずに『あゝそうか、それは難有』とその火で葉巻を吸ふた、『イエ莨の火ではありませんよ、御返禮に進上するのです』と云ふと『進上物か、進上物なら紙に包んで水引かけて持つて來い』と云はれた。

或る時木戸公が主催者となりて、各參議を自邸に會し、國事を議せられた事があります其時、西郷の來會が遲ひものですから、早く出席するやうに、と促された、西郷は裸體

で机に向ひ頻りに筆を馳せて居られたが、使ひの口上を聞くなり、大喝一聲着物がないのだ、緣先に干してある浴衣のかはくまで待つてくれと答へたゆへ、使者は早速馳せ歸り其趣きを木戸公へ申上ると、公は美服一領をもたせて更に來會を促された、西郷は漸く筆を投じて其美服を纒ひ、木戸邸に至れらたが、議は既に決し衆皆其來會の遲きを責めた、すると西郷は微笑を含んで、『木戸の服短きこと斯の如くぢや』と云ふて、遂に之れを木戸公に返さず、常に着ておられたそうです、如何に磊落で餘裕あるに敬服せざるを得んです。

南洲、弟の從道の邸に靜養して居られた時英國公使パークス、所要ありて西郷を尋ねた、馬車を驅りて其邸に至り、門に入らうとすると、一人の大きな男が弊衣を着、破れ帽子を被り、庭中の雜草中の掃除をして居るのを見て、パークスの思ふやう、これは定めて西郷の從僕であろうと、獨り合點して『西郷殿は御在宅でありますか』と問ふと今

の大きな男が『予が西郷である』と云ふて帽子をぬいだので、バークス大に驚き、直に下車して無禮を謝した、これよりバークスは西郷に敬意を拂ひ心から親交を得たりと云ふことです。

現今は自己に力もなく技量も乏しきにも抱はらず虛榮虛飾を敢て望む、實に身分を忘れ天職を敗して不相應の振舞をなして、遂に失敗を招き再び起つ事のできざるは自業自得であります、人は十貫を要する力有と云へども十二貫も超越の力を出さば果して仆れるは理の當然です、十貫に七八貫の力を出して二三貫の餘裕あらしめば安全無究であります。

第四十八、遁世の眞價

西行と鹿島明神……西行の往生……西行の口吟……芭蕉の贊

西行法師が東國へ下向ありし時、息栖明神と云ふに參詣せられ、それより鹿島大明神へ參詣せんと志し、其方面に歩みを運ばせられた、而るに前の息栖より鹿島に到る間に一里ほどは人跡たゑたる淋しき道があります、婦女子は勿論普通の男子も一人では通らぬ處でありましたが、元より道心堅固なる西行法師の事であるから、一人とぼ〳〵歩みながら左程心細くも無つたでしようが、しかし少々は心淋しくは思はれもしたらう、時に八十歳程でもあろうかと云ふ老人が、十六歳にもなりたらんかと思はれる容貌の美しき婦人に手を引かれて通るに遇はれました、西行其二人と道逆れになり、心の中に思ふには、この美人は老人の孫か曾孫か、何にしてもこの山中に手を引かれてまいるからには、ヨモ他人の道連れではあるまいと思ひ尋ねて云ふ樣『その御婦人は貴方の御娘ですか又孫樣ですか』、老人答へて云ふ『これは私が妻でございます』と聞て西行は驚き『貴君の御年は』『ハイ拙者は八十一歳にて妻は當年十八歳にございます』と西行は驚きのあ

まり取敢へず、

磯になく渚も遠き山中にいと、珍らしき若女見るかな

と一首を口吟まれますと、老人も直に

老の浪より來る年の悲しさに、見てもなくさむ若女なりけり

と返歌を爲された、暫くして老人等と別れ、又元の一人で鹿島明神へ參詣を遂げられた元よりの祈願でありましたから、其晩は社殿で一夜を明かされたが、眠るともなしにうと〳〵とせし夢に、社殿の扉がギーと開き中より晝の間道連れになりた、老人が束帶して冠を頂き、又手を引きし乙女は天冠を戴きこれに付き添ひて出で來れば、西行法師は仰ぎ見て大に敬ひ、さては當社の明神が道連れになり、我遁世者となれるものゝ隨緣の煩惱去り難き處あるを誡め玉ひしかゝ有難や勿體なやと、落涙せらるれば夢はさめた、斯くて西行は都に上り西の郊に庵を結び、一生不退の念佛者となりて、遂に西方往

生の素懷を遂げられました。

見るやいかにあだにも咲る朝顏の、花にさきだつ今朝の白露

これは西行のよまれた歌であります、みるやいかにとはとがめたことば、みたか見ぬか見ぬとはいはれまい、朝顏の花は日影まつ間の一盛、あだにはかないものぢやのに、それよりか猶はかないものは葉末の白露、朝顏の花はまだ、日の出るを待つ間の樂があれど、葉末に於ける白露は、その日の出るを待たずに、朝の嵐に落てこぼれ、跡形もなふなる、朝顏とは不定の世界、又白露とは人間の身に喩へてよんだ歌、いかさま此界の習ひは生住異滅の四相變遷とうつりかわり、春は木の芽を出し夏は盛んに、夏木立の形を顯はすと思ふと、忽ち秋は異相な搖落を示し、それより冬枯れの滅相を顯はす、人の身もその如く、幼なきより壯大なるに至り、病みて死する迄の一代記は、皆この生老病死の實現にして、まことに白露にも喩ふべきほどのはかなきことであります、芭蕉翁も

西行法師の像に賛をなして、

すてはてゝ身はなきものとおもへども、雪のふる日は寒くこそすれ

と書かれたとあります、實に寸鐵斷人の味ひありと云ふべきではありませんか。

第四十九、豪氣人を呑む

西郷南洲の愛妾……南洲の質素……南洲の口吟……南洲と是山和尚

維新の基礎漸く固まりし頃、武臣等頻りに驕りに長じ、豪者を都人士と競ふやうになりました、其頃西郷隆盛は二人の愛妾を家に容れたと云ふ風聞があつたので、少壯軍人等は之れを奇とし、其虚實を正さんため同輩の友人は西郷が館を尋ねて、『先生近頃妾を容れられたと聞きましたが、眞實ですかもし眞實ならばドウカ御面會致たうござると』西郷は平然と『眞實だ見せてやらう』と云ふて、頓て從僕を呼んで彼の愛妾を連れ來れ

よと命じたれば、從僕は二頭の獵犬をつれて來た、西郷は獵犬の頭上を撫でつゝ、『これ予が近頃召抱へたる愛妾だ』と少壯軍人等は事の意外なのにあきれかへり呆然として逃げかへりたとあります。

西郷隆盛が身を奉するに如何に質素なりしかは、居常飛白の筒袖を着し木綿の兵子帶を締め下駄を穿ち木杖を携へ、宛然たる老書生たりしに見ても知り得べきであります、而してこゝに猶其平生を察するに足るべき一事があります、西郷が參議の顯職に居られた時各參議達は、いづれも其從僕をして辨當を携へゆかしめて居られた、或日大隈參議の從僕、西郷の從僕に向て、『貴公の主人の辨當は何なりや』と問ふた、すると翁の從僕これに答へて『握り飯だ』と云つて風呂敷を解いて竹の皮包を開いてみると、大きな握飯に赤味噌を塗りたのが二つ入れてあつた、皆々其質素に驚き入つたといふことです。

隆盛は危機に臨みて泰然自若、克く其道を愆らず、能く其命を樂しめる所以のものは一

は先天的の賦生により、一は後天的の修養によつたのでありますが、前後二回五年に餘れる孤島生活は、彼が精神の修養には多大なる貢献をなしたに違ひありませぬ、其自作の詩に、

天歩艱難繫獄身　誠心豈莫耻忠臣　遙追事跡高山子　自養精神不咎人

又

幾歴辛酸志始堅　丈夫玉碎耻瓦全　我家遺法不知否　不爲兒孫買美田

又

貧居生傑士　勤業顯多難　堪雪梅花潔　經霜楓葉丹

と云ふがあります、後人以て座右の銘とすべきものです、其他

驅犬衝雲度萬山　傲然長嘯斷崖間　請看世上人心險　渉歴艱於山路艱

又

我有千絲髪　毿々黑於漆　我有一寸心　皓々白於雪

我髪猶可斷　我心不可斷

の如きも、亦大に誦すべきであります。

上野の戰爭前のことですが、西郷は一日是山和尚を尋ねた、取次のもの西郷を客間に通ふして去つて仕舞た、いくら待つて居ても是山和尚は出で來ない、西郷も大に閉口してア、拙者を一つ嫐る考へだなと推察し、よし一番、拙者が一つ先きに是山和尚を一驚せしめてやらうと待ち設けてをると其中に和尚の足音がしたから、窃に障子の影に身をひそめて、障子を開いて入らんとする和尚に突然大聲を發して、『和尚何故に來るの遲きや』、和尚は平氣な顔にて『老僧住持事繁しと』西郷も餘りに落付いたる態度ゆへ癪に障り、腰の刀に手をかけ『、今にも眞二つにせんとする勢『正當恁麽のとき作麽生』和尚は直に大喝一聲『喝』と叫だ、西郷も敬服したとの事です。

第五十、普遷と自覺

和泉式部の花……式部の發心……式部の誡……式部の教訓

人として感情がないと、無意味で送らねばなりませぬ人生何の趣味もないことゝなります、彼の和泉小式部が櫻花の咲きたるを見て、其花ほしさに其花を折りて遊び居りしに其樣を見て母の和泉式部は心を示して、

小式部よ其花おるな唯あそべ、又來ん春は何をながめん

と詠じましたれば、小式部は取りへず、

露の身を嵐の山におきながら、また來ん春といふぞ墓なき

此返歌を詠まれたるとき、母の和泉式部は非常に無常を觀し、道心堅固なる信者になられましたのです。

今和泉式部の因緣が書いてある誓願寺三卷傳の其大要を摘んで話しますと、和泉式部は源頼光の家臣保昌の妻でありますが、性到りて怜悧にして、法華經を讀誦し義理をよく傾得しておりました、其娘小式部の內待と共に日本に名を擧げたる和歌の名人でありますが、小式部內待十七歳の時、重病にかゝり危篤に陷られたれば、和泉式部は枕元に立ち寄り、我を殘して先き立ち玉ふかとさめ〳〵と泣き悲しみたれば、小式部なくなくも聲きれ〳〵と、

いかにせん行くべき方もおぼゑずに、親に先き立つ道をしらねば

と詠せられた、其時母式部の返歌に、

埋れ木の朽ちはつべきは殘りして、つぼめる花のさきに散るとは

かくて小式部內待は、遂に三月十八日に空しくなられた、母の悲み限りなく、殆んど狂せんばかりに泣き悲んで居られました、一週忌の當日に、母の式部は墓參して、苔衣着

たる石碑の銘を見て、涙と共に左の一首の歌を手向けられた、

もろともに苔の下には朽ちずして、埋れたる名を見るぞ悲しき

この逆縁によりて菩提心を起し、明師を求め大信者となりたのであります。

和泉式部が夫保昌に伴なはれて、丹後の國へ趣かれし時、此國のある山には鹿が澤山に住んで居るといふことを聞き、保昌は面白きことに思ひて人を雇ひておい出させ、明くるを遲しと待ち兼ねて居たが、夜の闌なる頃、鹿の聲いと哀れに聞ゆ、保昌は已に五更に近からむと云ふに、式部直に、

ことはりやいかでか鹿の泣かざらん、今宵かぎりの命とおもへば

と詠み、夫の狩を諫めましたら、保昌も歌の理にせめられ、遂に狩の思ひを止めたとあります、これより以後は此山の狩りは永く禁止されたとのことであります。

人は何時までかわらで有らふ筈はありませぬ、無常遷流の浮世だから、昨日の紅顔今日

の白骨とは、げに道理であります。

こゝに至りますと和泉式部は能く悟たものであります、式部は肥前の杵島郡錦浦と云ふ所に生れた人ですず、式部が他家に嫁した後に郷里の友人よりドウカ一返歸て來てくださいい、定めし昔しにかわらぬ綺麗な容貌で居らしやることであらふ、是非に歸り玉へやと頻りに手紙がきますから、式部は歸る事をせないで自ら若い時の姿を押繪にいたしまして其上に、

故郷にかへる小袖の色くちて、錦の浦や杵島なるらん

と一首の歌を添へられて送られたといふことです、これ友人に自覺的親切なる教訓をせられたのであります。

大正五年五月一日印刷
大正五年五月五日發行

【奥附】

定價金參拾錢

著者　谷田探海
印刷者　大阪市東區石町二丁目百五十四番屋敷　今井彦兵衛
印刷所　大阪市東區天神橋南詰（電話東四五五七番）　今彦活版製造印刷所
發行者　大阪市北區伊勢町三六　森本得之
發行所　大阪市北區西寺町一丁目（冷雲院）　慈教青年會出版部
發賣所　大阪市北區伊勢町　森本出版協會
電話東二六〇三番・東二六〇四番
振替口座大阪二八〇四七番

慈教
青年會
發行

339
704

終